

令和5年度  
「国の財務書類」のポイント  
(一般会計・特別会計)

令和7年1月  
財務省主計局

国の財務書類は、国全体（一般会計及び特別会計）の資産や負債などのストックの状況、費用や財源などのフローの状況といった財務状況を一覽でわかりやすく開示する観点から、企業会計の考え方及び手法（発生主義、複式簿記）を参考として、平成15年度決算分より作成・公表しているものです。

国の財務書類においては、一般会計及び特別会計を合算した「国の財務書類」（一般会計・特別会計）のほか、国（各省庁）が監督権限を有し、国（各省庁）から財政支出を受けている独立行政法人などを連結した「連結財務書類」を参考として作成しています（なお、令和5年度の「連結財務書類」については、令和7年3月に公表を予定しています。）。

（注1）本資料における計数については、各単位未満を四捨五入しているため、合計等において一致しない場合があります。また、単位未満の計数がある場合は「0.0」、皆無の場合は「-」で表示しています。なお、令和4年度以前の計数は各年度の公表額（前年度との比較対照等のため組み替えている項目を除く）であり、翌年度以降における会計方針の変更を反映したものではありません。

（注2）本資料における外国為替相場については、各年度末における基準外国為替相場（当該月の前々月における実勢相場の平均値として、財務大臣が日本銀行において公示する相場）を記載しています。

（注3）本資料の参考となる主な指標は以下のとおりです。

	令和5年3月末	令和6年3月末
基準外国為替相場	1ドル＝130円	1ドル＝147円
日経平均株価	28,041.48円	40,369.44円
普通国債の利率加重平均	0.76%	0.77%

# 目 次

1. 令和5年度「国の財務書類」（一般会計・特別会計）の概要	1
2. 財務状況の説明(対前年度比較)	
(1)ストック(資産・負債)状況について	3
(2)フロー(費用・財源)状況について	5
3. 資産・負債差額の増減要因	9
4. 財務状況の推移	
(1)ストック(資産・負債)及びフロー(費用・財源)の推移	11
(2)ストック(資産・負債)の科目別内訳の推移	13
(3)フロー(費用・財源)の科目別内訳の推移	15
(4)国の資産をどう見るか	17
<b>【参考】</b>	
(1)国の財務書類の構成	19
(2)令和5年度国の「歳入歳出決算」と「財務書類」について	21
(3)主要経費別分類で見る国の歳出決算額(純計)について	23
(4)国の財務書類における会計別(一般会計・特別会計)の内訳	24
(5)公債残高及び償還について	25
(6)社会保障財源及び給付の全体像と国の財務書類(一般会計・特別会計)の関係	26
(7)公的年金(厚生年金・国民年金)について	27

# 1. 令和5年度「国の財務書類」(一般会計・特別会計)の概要

## 貸借対照表

(単位:兆円)

	4年度末	5年度末	増▲減		4年度末	5年度末	増▲減
<b>&lt;資産の部&gt;</b>				<b>&lt;負債の部&gt;</b>			
現金・預金	53.8	65.4	11.6	未払金等	12.1	12.6	0.5
有価証券	125.6	142.3	16.7	政府短期証券	87.7	94.8	7.1
たな卸資産	4.3	4.3	0.0	公債	1,143.9	1,164.3	20.4
未収金等	11.7	12.1	0.3	借入金	33.8	34.2	0.4
前払費用	2.8	2.4	▲ 0.4	預託金	11.6	10.5	▲ 1.1
貸付金	125.1	122.3	▲ 2.8	責任準備金	9.7	9.8	0.1
運用寄託金	114.7	115.6	0.9	公的年金預り金	123.0	125.5	2.5
その他の債権等	11.5	14.0	2.5	退職給付引当金等	5.6	5.5	▲ 0.2
貸倒引当金	▲ 1.4	▲ 1.3	0.1	その他の負債	15.2	16.8	1.5
有形固定資産	194.6	196.7	2.1				
無形固定資産	0.4	0.5	0.1				
出資金	97.6	103.7	6.2				
				<b>負債合計(B)</b>	<b>1,442.7</b>	<b>1,473.8</b>	<b>31.1</b>
				<b>&lt;資産・負債差額の部&gt;</b>			
				<b>資産・負債差額(C)</b>	<b>▲ 702.0</b>	<b>▲ 695.7</b>	<b>6.3</b>
<b>資産合計(A)</b>	<b>740.7</b>	<b>778.1</b>	<b>37.4</b>	負債及び			
				資産・負債差額合計	740.7	778.1	37.4

## 業務費用計算書

(単位:兆円)

	4年度	5年度	増▲減
人件費	5.2	5.2	▲ 0.0
社会保障給付費	52.2	52.2	0.0
補助金・交付金等(注1)(注2)	78.1	71.4	▲ 6.8
持続化給付金等	1.2	-	▲ 1.2
地方交付税交付金等	21.6	22.0	0.4
減価償却費	5.5	5.6	0.0
支払利息	6.3	6.7	0.4
その他の業務費用	7.4	7.3	▲ 0.1
<b>業務費用合計(D)</b>	<b>177.6</b>	<b>170.4</b>	<b>▲ 7.2</b>

## 資産・負債差額増減計算書

(単位:兆円)

	4年度	5年度	増▲減
<b>前年度末資産・負債差額</b>	<b>▲ 687.0</b>	<b>▲ 702.0</b>	<b>▲ 15.0</b>
<b>本年度業務費用合計</b>	<b>177.6</b>	<b>170.4</b>	<b>▲ 7.2</b>
租税等収入	76.3	77.4	1.0
社会保険料	57.7	59.7	2.0
その他	11.4	14.3	2.9
<b>財源合計(E)</b>	<b>145.4</b>	<b>151.3</b>	<b>6.0</b>
<b>超過費用(財源-業務費用)(F)</b>	<b>▲ 32.2</b>	<b>▲ 19.0</b>	<b>13.2</b>
資産評価差額	▲ 2.6	4.5	7.0
上記以外 為替換算差額	18.5	21.3	2.9
公的年金預り金 の変動に伴う増減	▲ 0.8	▲ 2.5	▲ 1.7
その他資産・負債 差額の増減	2.1	2.0	▲ 0.1
<b>本年度末資産・負債差額(C)</b>	<b>▲ 702.0</b>	<b>▲ 695.7</b>	<b>6.3</b>

(注1) 補助金・交付金等には、地方公共団体や独立行政法人などへの委託費、運営費交付金などが含まれています。

(注2) 補助金・交付金等には、社会保障に係る費用が41.8兆円(前年度は47.0兆円)含まれています。(「社会保障に係る費用」は、これまで「社会保障関係経費」として示していたものと同一のものです。)

※財政資金の流れを区別に示した「区分別収支計算書」は、『国の財務書類』ガイドブックの31ページに掲載しています。

## (参考)

## 主要項目の5カ年推移

(単位:兆円)

	元年度(末)	2年度(末)	3年度(末)	4年度(末)	5年度(末)
資産合計(A)	681.3	720.8	723.9	740.7	778.1
負債合計(B)	1,273.1	1,376.0	1,411.0	1,442.7	1,473.8
資産・負債差額(C)	▲ 591.8	▲ 655.2	▲ 687.0	▲ 702.0	▲ 695.7
業務費用合計(D)	149.8	190.7	180.1	177.6	170.4
うち補助金・交付金等	53.9	85.3	78.5	78.1	71.4
財源合計(E)	129.5	131.7	139.3	145.4	151.3
超過費用(F)	▲ 20.3	▲ 59.1	▲ 40.8	▲ 32.2	▲ 19.0

- ◇ 令和5年度末における国の資産及び負債の状況は、資産合計は778.1兆円（対前年度末比+37.4兆円）、負債合計は1,473.8兆円（対前年度末比+31.1兆円）となり、資産と負債の差額である資産・負債差額は、前年度末に比べマイナス幅は6.3兆円縮小し、▲695.7兆円となりました。
- ◇ 令和5年度の業務費用合計は170.4兆円（対前年度比▲7.2兆円）、財源合計は151.3兆円（対前年度比+6.0兆円）となり、財源と費用の差額である超過費用は、前年度に比べ13.2兆円減少し▲19.0兆円となりました。

## 【令和5年度財務書類の特色】

R5年度  
財政  
運営

令和5年度は、「経済財政運営と改革の基本方針2022」等における財政健全化目標の達成に向けて、歳出・歳入両面の改革を着実に推進していく中で、足元の物価高を克服しつつ、経済再生の実現をはじめとする重要な政策課題に必要な対応を行い、我が国経済を持続可能で一段高い成長経路に乗せていくことを目指すための当初予算の編成、更には「デフレ完全脱却のための総合経済対策」を実施するための補正予算が編成されました。

業務  
費用  
の  
状況

業務費用の合計は、前年度に比べて7.2兆円減少し、170.4兆円となりました。

主な  
要因

- ・「補助金・交付金等」が、物価高騰への対策や脱炭素成長型経済中心の産業構造・社会構造へ転換する取り組みに対する補助金等が増加した一方、コロナ禍からの社会経済活動の正常化の進行により、新型コロナウイルス感染症関連の補助金等が減少したことなどにより6.8兆円減少
- ・コロナ禍において中小企業等の事業の継続を下支えするための「持続化給付金等」が終了したことにより1.2兆円皆減

財  
源  
の  
状況

財源の合計は、前年度に比べて6.0兆円増加し、151.3兆円となりました。

主な  
要因

- ・「租税等収入」が、好調な企業収益を背景に法人税が増加したこと等から1.0兆円増加
- ・「社会保険料」が、被保険者数や賃金の増加等を背景に厚生年金保険料や労働保険料が増加したこと等から2.0兆円増加
- ・「その他」の財源が、外国為替資金特別会計における運用益等が増加したこと等から2.9兆円増加

これらの結果、1年間の業務費用を財源で賄えない状態を示す超過費用（財源と業務費用の差額）は、前年度に比べて13.2兆円減少し、▲19.0兆円となりました。この水準は、新型コロナウイルス感染症が拡大する前の令和元年度▲20.3兆円と同水準となります。

資  
産  
の  
状況

資産合計は、前年度末に比べて37.4兆円増加し、778.1兆円となりました。

主な  
要因

- ・「現金・預金」が、日本銀行預金の増加や為替相場の変動（令和4年度末1ドル130円→令和5年度末1ドル147円）による外貨預け金の増価等により11.6兆円増加
- ・「有価証券」が、為替相場の変動による外貨証券の増価等により16.7兆円増加
- ・「出資金」が、出資先法人の純資産額増加に伴う評価増等により6.2兆円増加

ス  
ト  
ック

負  
債  
の  
状況

負債合計は、前年度末に比べて31.1兆円増加し、1,473.8兆円となりました。

主な  
要因

- ・業務費用を租税収入等で賄えない不足分を公債発行等により手当しているため、一般会計の普通国債等が24.6兆円増加した一方、財政融資資金貸付金の貸付けの財源を調達するために発行した財政投融资特別会計国債（以下、財投債）が6.4兆円減少したことなどから、「公債」が20.4兆円増加

これらの結果、資産・負債差額は▲695.7兆円となり、前年度末に比べマイナス幅は6.3兆円縮小しましたが、引き続き多額のマイナスの資産・負債差額が存在する厳しい財政状況に変わりありません。マイナス幅が6.3兆円縮小したのは、超過費用の▲19.0兆円に対して、出資金等の資産評価差額4.5兆円、外貨証券等の為替換算差額21.3兆円といった評価益が生じたことによるものですが、出資金や外貨証券等の資産は、財源確保のため売却・換金することが想定されていません。（P17・P18参照）

次のページからは、令和5年度のストックとフローの状況について、詳細に説明します。

## 2. 財務状況の説明(対前年度比較)

### (1) ストック(資産・負債)状況について

#### 資 産(778.1兆円:対前年度末比+37.4兆円)

##### 主な増減要因等について

##### ➤ 現金・預金(65.4兆円:対前年度末比+11.6兆円)

- 日本銀行預金の増加(※)や、為替相場の変動(令和4年度末1ドル130円→令和5年度末1ドル147円)等による外貨預け金の増加(+4.7兆円)などにより、現金・預金全体として11.6兆円増の65.4兆円となりました。

(※)増加の主な要因として、前倒債の発行額の増加(+8.9兆円)があります。前倒債とは、翌年度に満期を迎える国債の償還のための資金を確実に調達し、年度間の国債発行の平準化を図るため、国会の議決を経た範囲内において、前年度にあらかじめ発行する借換債の一部です。前倒債(負債)の発行により、対応関係にある現金・預金(資産)が同額増加したものです。

##### ➤ 有価証券(142.3兆円:対前年度末比+16.7兆円)

- 過去の為替介入(円売り・外貨買い)等により取得した外貨証券が、為替換算により増価(+17.9兆円)した一方、時価評価に伴う評価減(▲1.2兆円)が生じたことなどにより、全体として16.7兆円増の142.3兆円となりました。

##### ➤ 貸付金(122.3兆円:対前年度末比▲2.8兆円)

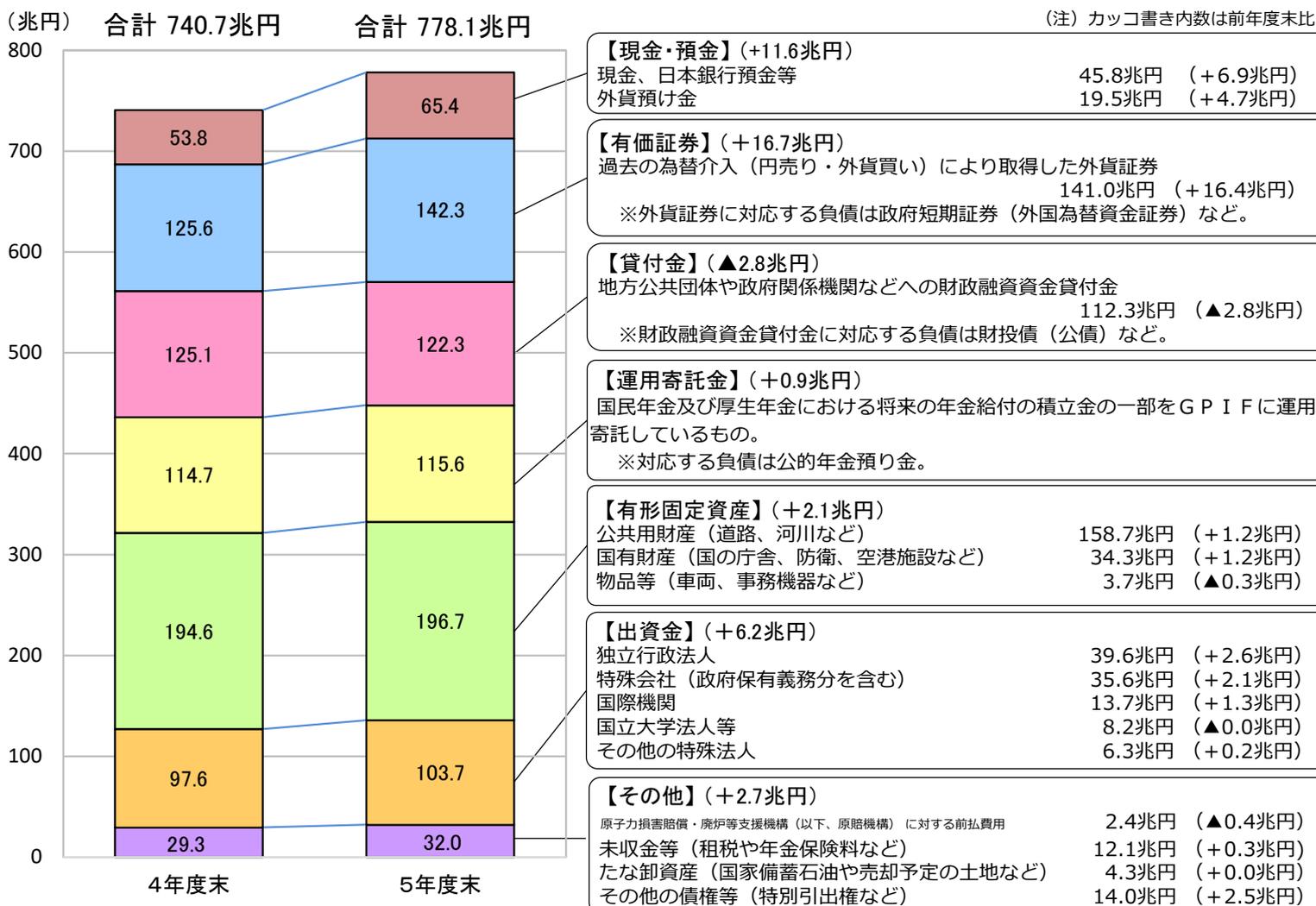
- 財政融資資金貸付金において、(株)日本政策金融公庫や地方公共団体等への貸付金が減少したことなどにより、全体として2.8兆円減の122.3兆円となりました。

##### ➤ 運用寄託金(115.6兆円:対前年度末比+0.9兆円)

- 厚生年金保険料が増加したことなどにより、0.9兆円増の115.6兆円となりました。なお、運用寄託金は、年金積立金管理運用独立行政法人(以下、GPIF)に運用寄託しているものであり、当該金額は預入額(現金ベース)を示しています(参考:令和5年度末のGPIFの金融商品の時価246.0兆円、令和5年度における運用益45.4兆円)。

##### ➤ 出資金(103.7兆円:対前年度末比+6.2兆円)

- 出資先法人の純資産額増加に伴う評価増(+2.9兆円)や株式の時価評価に伴う評価増(+1.9兆円)、出資先法人への追加出資等(+1.3兆円)により、全体として6.2兆円増の103.7兆円となりました。



# 負債(1,473.8兆円:対前年度末比+31.1兆円)

## 主な増減要因等について

### ➤ 政府短期証券(94.8兆円:対前年度末比+7.1兆円)

- 外国為替資金特別会計において、国庫余裕金の繰替使用等の減少に伴い外国為替資金証券の発行残高が増加したことなどにより、全体として7.1兆円増の94.8兆円となりました。

(※) 国庫余裕金の繰替使用とは、個別の特別会計等で資金不足となっている場合に、国庫全体で一時的に生じている融通可能な余裕金をその特別会計等に無利子で融通(繰替使用)することです。

### ➤ 公債(1,164.3兆円:対前年度末比+20.4兆円)

- 公共事業費や出資金等の歳出の財源を調達するために発行した建設国債は3.8兆円増の301.3兆円、いわゆる赤字国債である特例国債は21.2兆円増の730.1兆円、民間によるGX投資(※)を促進するために発行した脱炭素成長型経済構造移行債(いわゆるGX経済移行債)は皆増の2.6兆円となりました。一方、財政融資資金貸付金の貸付けの財源を調達するために発行した財投債は6.4兆円減の94.5兆円、復興事業に必要な財源として発行された復興債は0.3兆円減の4.9兆円となったことなどにより、全体として公債の残高は20.4兆円増の1,164.3兆円となりました。

(※) GX(グリーントランスフォーメーション)とは、化石エネルギー中心の産業構造・社会構造をクリーンエネルギー中心へ転換する取り組みです。

### ➤ 借入金(34.2兆円:対前年度末比+0.4兆円)

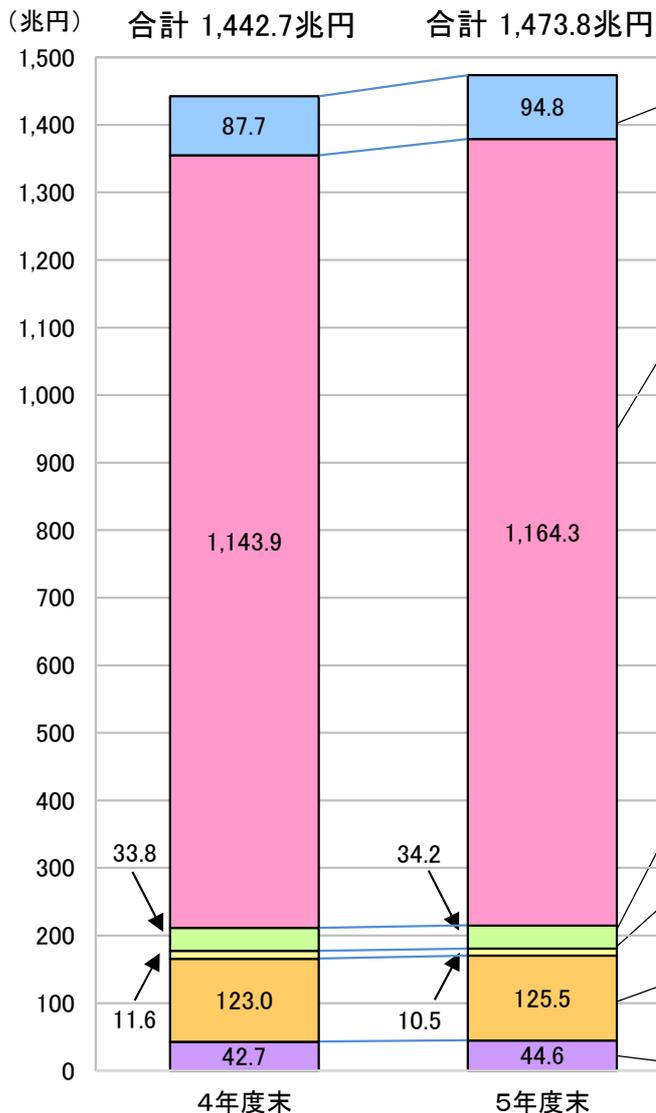
- 交付税及び譲与税配付金特別会計において、地方交付税交付金の財源に充てるため、民間金融機関から資金調達をしたことなどにより、民間金融機関等からの借入金は全体として0.4兆円増の34.2兆円となりました。

(※) 交付税及び譲与税配付金特別会計における財政融資資金を含めた借入金の総額は減少しています。

### ➤ 公的年金預り金(125.5兆円:対前年度末比+2.5兆円)

- 厚生年金及び国民年金において保有する現金・預金が増加(+1.7兆円)したことや、将来の年金給付財源の一部である運用寄託金が増加(+0.9兆円)したことなどにより、2.5兆円増の125.5兆円となりました。

(注)カッコ書き内数は前年度末比



<b>【政府短期証券】(+7.1兆円)</b>		
外国為替資金証券	93.4兆円	(+7.1兆円)
(過去の為替介入時に円貨を調達するために発行)		
石油証券	1.2兆円	(▲0.0兆円)

<b>【公債】(+20.4兆円)</b>		
建設国債	301.3兆円	(+3.8兆円)
特例国債	730.1兆円	(+21.2兆円)
財投債	94.5兆円	(▲6.4兆円)
復興債	4.9兆円	(▲0.3兆円)
年金特例国債	2.5兆円	(▲0.3兆円)
G X 経済移行債	2.6兆円	(+2.6兆円)

<参考> 公債の保有者内訳  
 中央銀行53.25%、預金取扱機関8.85%、  
 保険・年金基金21.12%、公的年金5.56%、家計1.25%、  
 海外6.50%、その他3.47%  
 (出典) 日本銀行「資金循環統計」(令和5年度末)  
 (注) 国の財務書類における公債等残高は、出納整理期間発行額を含んだ償却原価法による額であるのに対し、資金循環統計の残高は、年度末時点の時価ベースの額であることから、残高の計数は異なります。

<b>【借入金】(+0.4兆円) 民間金融機関等からの借入れ</b>		
地方財政の財源不足(地方負担分)を補填するための財源		
(交付税及び譲与税配付金特別会計)	24.3兆円	(+0.3兆円)
原賠機構に対して発行された交付国債の償還財源		
(エネルギー対策特別会計)	8.3兆円	(+0.1兆円)

<b>【預託金】(▲1.1兆円) 財政融資資金に預託されているもの</b>		
(株) 日本政策金融公庫	7.7兆円	(▲0.1兆円)
(独) 中小企業基盤整備機構	1.3兆円	(▲0.8兆円)
国家公務員共済組合連合会	1.5兆円	(▲0.2兆円)

**【公的年金預り金】(+2.5兆円)**  
 将来の年金給付のための資産(運用寄託している年金の積立金など)に対応する負債として計上。

<b>【その他】(+1.9兆円)</b>		
責任準備金(労災年金や地震再保険など)	9.8兆円	(+0.1兆円)
退職給付引当金	5.1兆円	(▲0.2兆円)
その他の債務等(特別引出権純累積配分額など)	14.4兆円	(+1.5兆円)

※資産と負債の対応関係についてはP17,18をご参照ください。

## (2) フロー(費用・財源)状況について

### 費用(170.4兆円:対前年度比▲7.2兆円)

#### 主な増減要因等について

##### ➤ 社会保障給付費 (52.2兆円:対前年度比+0.0兆円)

- 年金受給者数の増加等に伴い、基礎年金給付費が0.6兆円、厚生年金給付費が0.3兆円増加した一方、新型コロナウイルス感染症の影響に伴う雇用調整助成金の特例措置の終了により雇用安定等給付費が0.8兆円減少したことなどにより、前年度と同水準の52.2兆円となりました。

##### ※ 社会保障に関する費用 (94.0兆円:対前年度比▲5.2兆円)

社会保障に関する費用は、「社会保障給付費」だけでなく、「補助金・交付金等」にも41.8兆円(令和4年度は47.0兆円)含まれています。これらの社会保障に関する費用全体では、5.2兆円減の94.0兆円となりましたが、新型コロナウイルス感染症対策にかかる補助金等が減少したことによるものです。

##### ➤ 補助金・交付金等 (71.4兆円:対前年度比▲6.8兆円)

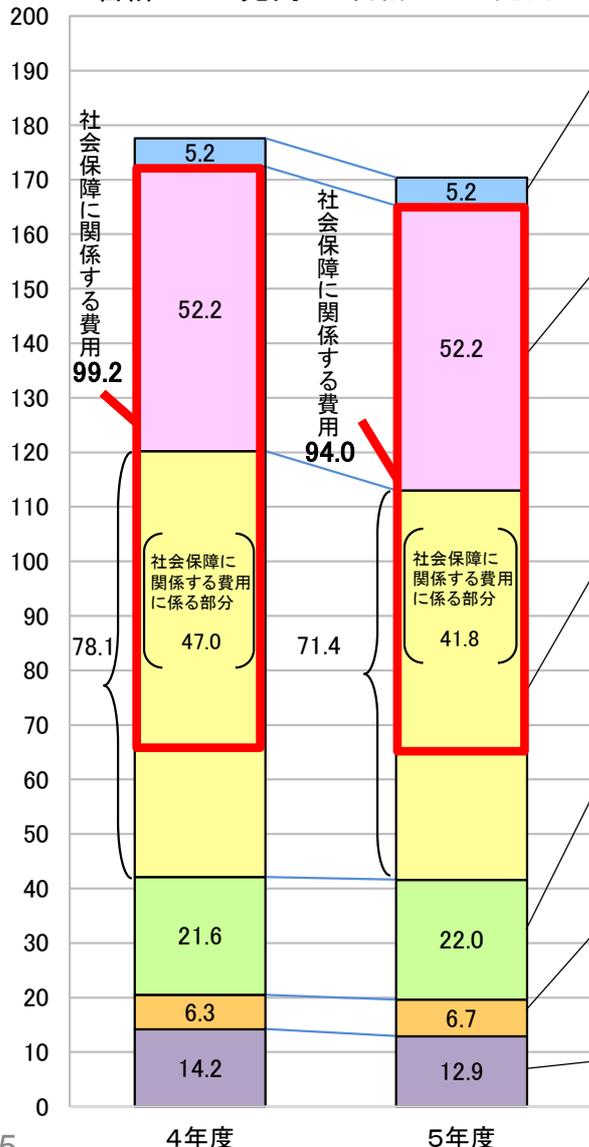
- 物価高騰への対応としてのエネルギー価格激変緩和対策事業費補助金(+2.3兆円)や物価高騰対応重点支援地方創生臨時交付金(+1.0兆円)、カーボンニュートラル実現に向けた脱炭素成長型経済構造移行推進対策費補助金(+1.1兆円)が増加した一方、新型コロナウイルス感染症対策にかかる新型コロナウイルス感染症緊急包括支援交付金(▲2.6兆円)や新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金(▲1.3兆円)、中小企業等事業再構築促進補助金(▲1.3兆円)が減少したことなどにより、全体として6.8兆円減の71.4兆円となりました。(P7参照)

##### ➤ 地方交付税交付金等 (22.0兆円:対前年度比+0.4兆円)

- 地方交付税交付金が地方交付税の法定率分の原資である国税(所得税、法人税等)の税収が増加したこと等により0.4兆円増の19.0兆円となり、全体として0.4兆円増の22.0兆円となりました。

(兆円) 合計 177.6兆円 合計 170.4兆円

(注)カッコ書き内数は前年度比



#### 【人件費】(▲0.0兆円)

職員の給与等	4.6兆円 (+0.1兆円)
賞与引当金繰入額・退職給付引当金繰入額	0.6兆円 (▲0.1兆円)

#### 【社会保障給付費】(+0.0兆円)

基礎年金給付費	24.8兆円 (+0.6兆円)
国民年金給付費	0.2兆円 (▲0.0兆円)
厚生年金給付費	23.7兆円 (+0.3兆円)
失業等給付費	1.2兆円 (+0.0兆円)
育児休業給付費	0.7兆円 (+0.1兆円)
雇用安定等給付費	0.2兆円 (▲0.8兆円)
その他の社会保障費	1.4兆円 (▲0.1兆円)
(労災保険給付費、年金生活者支援給付費給付費など)	

#### 【補助金・交付金等】(▲6.8兆円)

地方公共団体、独立行政法人、国立大学法人などへ交付している補助金、委託費、運営費交付金等。			
補助金等	49.6兆円 (▲6.4兆円)	委託費等	2.8兆円 (▲0.3兆円)
保険料等交付金	11.0兆円 (+0.1兆円)	運営費交付金	3.1兆円 (▲0.1兆円)
国家公務員共済組合連合会等交付金	4.8兆円 (▲0.0兆円)		
※ 補助金・交付金等には社会保障に関する費用(41.8兆円(令和4年度47.0兆円))が含まれており、主に厚生労働省所管の健康保険事業などの財源として全国健康保険協会に交付している保険料等交付金(11.0兆円)、国家公務員共済組合連合会等交付金(4.8兆円)、後期高齢者医療給付費等負担金(4.3兆円)などの補助金等から構成されています。			

#### 【地方交付税交付金等】(+0.4兆円)

国税の一定割合などを原資として地方公共団体に交付するもの。	
地方交付税交付金	19.0兆円 (+0.4兆円)
地方特例交付金	0.2兆円 (▲0.0兆円)
地方譲与税譲与金	2.8兆円 (+0.0兆円)

#### 【支払利息】(+0.4兆円)

公債や借入金などの資金調達に関して発生した利息。  
(普通国債の利率加重平均:令和4年度末0.76%→令和5年度末0.77%)

#### 【その他】(▲1.3兆円)

減価償却費	5.6兆円 (+0.0兆円)	庁費等	4.4兆円 (+0.1兆円)
資金援助交付金	0.4兆円 (▲0.1兆円)		
出資金等評価損	0.3兆円 (+0.1兆円)	資産処分損益	0.4兆円 (+0.3兆円)
持続化給付金等	-兆円 (▲1.2兆円)		

# 財 源(151.3兆円:対前年度比+6.0兆円)

## 主な増減要因等について

### ➤ 租税等収入(77.4兆円:対前年度比+1.0兆円)

- ・所得税は雇用・賃金の増加を背景とした給与と税収が増加した一方、親子間配当(親法人が子法人から受け取る株式等の配当)の源泉徴収の取り止めにより配当税収が減少したこと等により0.5兆円減の22.1兆円、法人税は企業収益の増加等により0.9兆円増の15.9兆円、消費税は前年度と同水準の23.1兆円となったことなどにより、全体として1.0兆円増の77.4兆円になりました。

### ➤ 社会保険料(59.7兆円:対前年度比+2.0兆円)

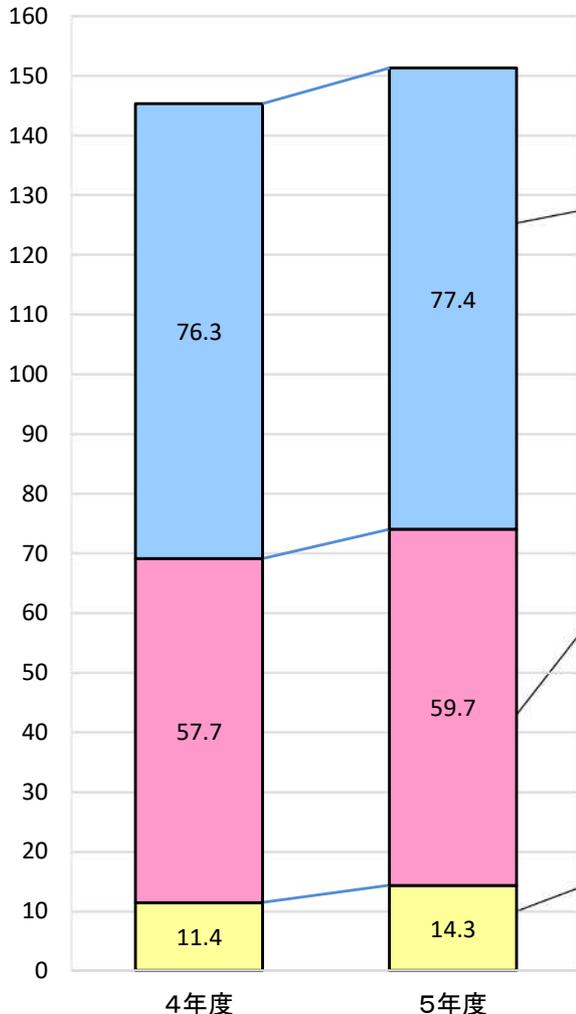
- ・厚生年金保険料が被保険者数や賃金(標準報酬月額や標準賞与額)の増加等により1.0兆円増の35.2兆円、労働保険料が適用事業所数の増加による被保険者数の増加や雇用保険料率の引き上げ等により0.9兆円増の4.1兆円となったことなどから、全体として2.0兆円増の59.7兆円になりました。

### ➤ その他(14.3兆円:対前年度比+2.9兆円)

- ・外国為替資金特別会計における運用益等が金利上昇による利子収入の増加等を受け1.6兆円増の4.8兆円となったことなどにより、全体として2.9兆円増の14.3兆円になりました。

(兆円) 合計 145.4兆円      合計 151.3兆円

(注)カッコ書き内数は前年度比



#### 【租税等収入】(+1.0兆円)

一般会計の歳入に組み入れられた所得税や法人税、消費税などと、特別会計に直接組み入れられた特定の税収入を計上。

所得税	22.1兆円 (▲0.5兆円)
法人税	15.9兆円 (+0.9兆円)
消費税	23.1兆円 (+0.0兆円)
相続税	3.6兆円 (+0.6兆円)
揮発油税	2.1兆円 (+0.0兆円)
酒税	1.2兆円 (▲0.0兆円)
印紙収入	1.0兆円 (+0.0兆円)
関税	0.9兆円 (▲0.1兆円)
復興税	0.5兆円 (▲0.0兆円)
その他(たばこ税、石油石炭税など)	7.2兆円 (+0.1兆円)

#### 【社会保険料】(+2.0兆円)

年金保険料、基礎年金の給付に充てるための拠出金収入、健康保険料及び船員保険料、労働保険料など。

厚生年金保険料	35.2兆円 (+1.0兆円)
国民年金保険料	1.6兆円 (▲0.1兆円)
拠出金収入(基礎年金)	2.1兆円 (▲0.3兆円)
健康保険料及び船員保険料	11.4兆円 (+0.3兆円)
労働保険料	4.1兆円 (+0.9兆円)
国家公務員共済組合連合会等拠出金収入	4.4兆円 (▲0.1兆円)
その他(拠出金収入(子ども・子育て支援)など)	0.7兆円 (+0.0兆円)

#### 【その他】(+2.9兆円)

資産の運用益(貸付金や有価証券などの利子収入)や法律で定められた納付金収入、負担金収入、手数料収入、国有財産利用収入など。

外国為替資金特別会計における運用益等	4.8兆円 (+1.6兆円)
日本銀行納付金	2.2兆円 (+0.2兆円)
財政投融资特別会計における運用益等	1.0兆円 (+0.1兆円)
公共事業費負担金	0.7兆円 (+0.0兆円)
その他(GPIFからの納付金収入など)	5.6兆円 (+1.0兆円)

## 超過費用(財源合計-業務費用合計=▲19.0兆円)

### 多額の超過費用と公債発行

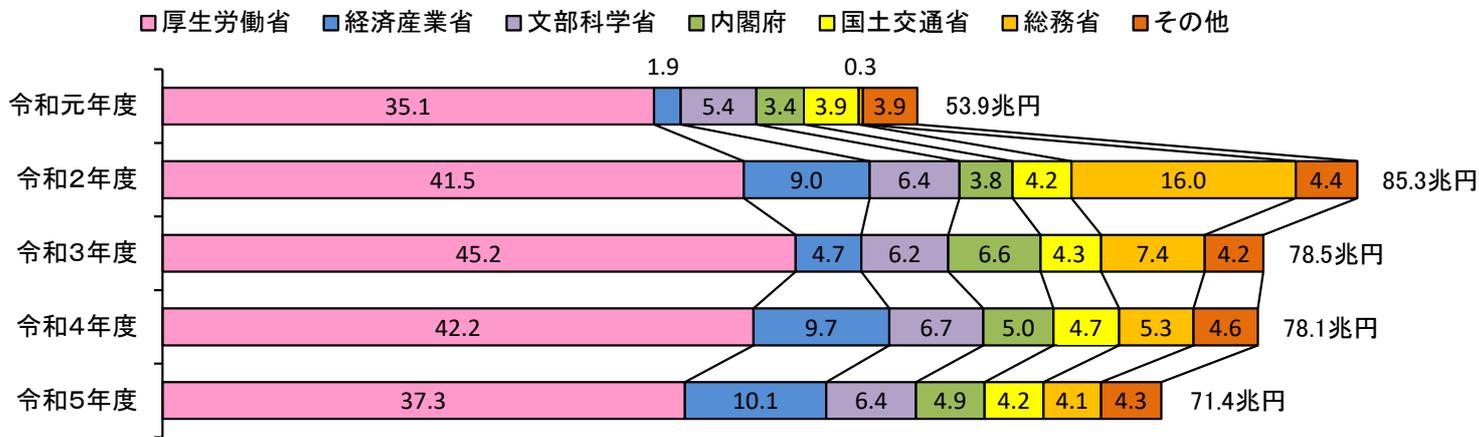
「財源合計(151.3兆円)」から「業務費用合計(170.4兆円)」を差し引きすると▲19.0兆円となり、一年間の業務費用を財源で賄いきれず、引き続き多額の超過費用が発生しており、費用の超過分は公債の発行等により予算執行に必要な財源を確保しています。

なお、この超過費用が発生している状況は、企業会計の考え方で見ると、「当期純損失」(いわゆる赤字決算)であるといえます。

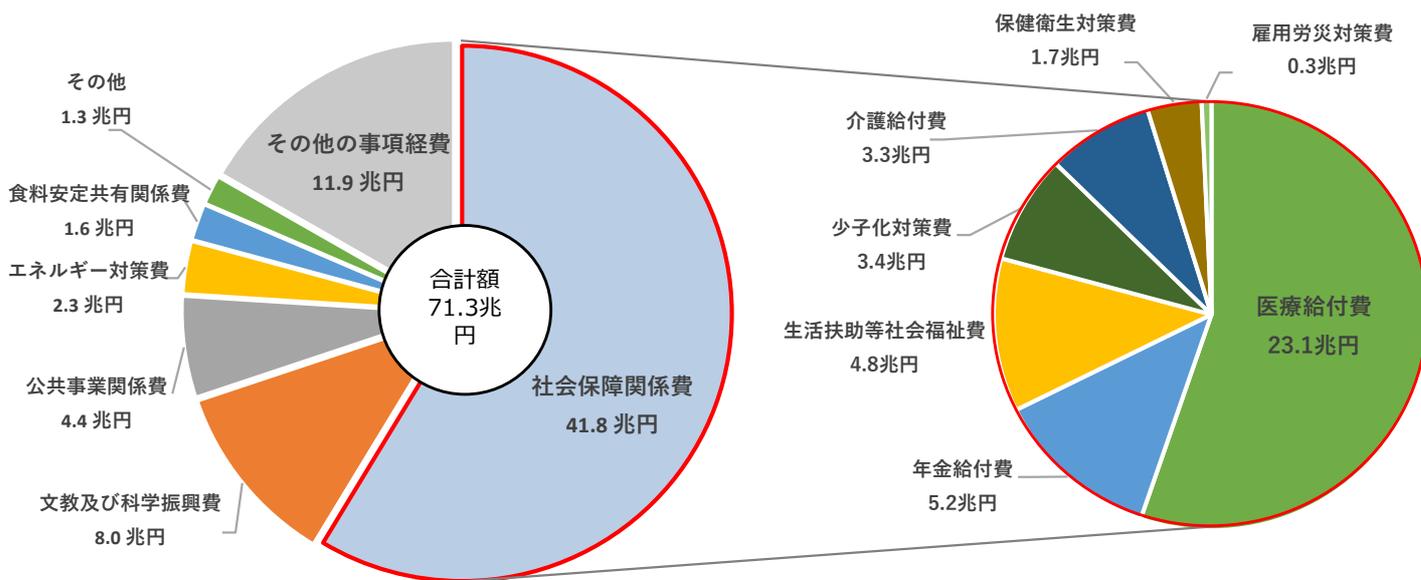
# 補助金・交付金等について

- ◇ 「補助金・交付金等」は、地方公共団体や民間団体等を通じて、社会保障、公共事業、文教及び科学技術振興等、各種の行政施策の遂行のための重要な財源として使用されています。
- ◇ 令和5年度の「補助金・交付金等」は71.4兆円（業務費用の41.9%）であり、この水準は、新型コロナウイルス感染症が拡大する前の令和元年度の53.9兆円を依然として大きく上回っています。
- ◇ 主要経費ごとに分類すると、社会保障関係費が41.8兆円と全体の6割弱を占め、そのうち医療給付費が半分以上を占めています。

## 〈補助金・交付金等の所管別内訳〉



## 〈補助金・交付金等の主要経費別内訳〉



〈主な所管の「補助金・交付金等」(保険料等交付金、国家公務員共済組合連合会等交付金、運営費交付金を除く)〉  
各所管において、支出額が上位3件(厚生労働省のみ上位5件)の「補助金・交付金等」を記載。(単位:億円(単位未満四捨五入))

### (1) 厚生労働省 (21.0兆円: 対前年度比▲5.0兆円)

地方公共団体に対する医療や介護、福祉等の給付費負担金や職業訓練補助など、国民全体の健康・福祉・生活に寄与しています。

名称	R 5	R 4	増減
後期高齢者医療給付費等負担金	42,869	41,232	1,637
介護給付費等負担金	21,273	20,867	406
国民健康保険療養給付費等負担金	16,362	17,538	▲1,175
障害者自立支援給付費負担金	14,672	13,643	1,029
医療扶助費等負担金	13,995	13,525	470

## (2) 経済産業省 (9.7兆円：対前年度比+0.6兆円)

中小企業支援、地域の産業振興、新エネルギーの導入促進、脱炭素社会への取組の推進等を図るため、民間団体、地方公共団体等へ交付しています。

名称	R5	R4	増減
エネルギー価格激変緩和対策事業費補助金(※)	56,035	33,165	22,869
産業技術・環境・産業標準政策推進研究開発等事業費補助金	13,505	11,060	2,446
脱炭素成長型経済構造移行推進対策費補助金	10,506	-	10,506

(※) R4の金額は燃料油価格激変緩和強化対策事業費補助金を含む

## (3) 内閣府 (4.9兆円：対前年度比▲0.1兆円)

保育の受け皿整備や児童手当の交付等による子ども・子育て支援の推進等に寄与しています。

名称	R5	R4	増減
子どものための教育・保育給付交付金	15,807	15,547	260
児童手当等交付金	11,415	11,930	▲516
障害児入所給付費等負担金(※)	4,175	3,622	553

(※) R4の金額は厚生労働省計上分

## (4) 文部科学省 (4.6兆円：対前年度比▲0.3兆円)

地方公共団体への義務教育費国庫負担金等を通じて、教育・文化・研究開発・スポーツ等の推進に寄与しています。

名称	R5	R4	増減
義務教育費国庫負担金	15,608	15,169	438
高等学校等就学支援金交付金	3,885	3,952	▲67
私立大学等経常費補助金	2,887	2,907	▲20

## (5) 国土交通省 (4.2兆円：対前年度比▲0.5兆円)

主に道路、河川等の社会資本整備に関する事業、観光立国実現に向けて観光産業の活性化等の事業を行う地方公共団体等へ交付しています。

名称	R5	R4	増減
防災・安全交付金	10,846	11,595	▲749
社会資本整備総合交付金	5,581	6,073	▲492
訪日外国人旅行者周遊促進事業費補助金	3,471	8,216	▲4,745

## (6) 総務省 (4.1兆円：対前年度比▲1.2兆円)

地方公共団体等を通じた国民生活の基盤に広く関わる行政機能を発揮するための事業等の財源として交付しています。

名称	R5	R4	増減
新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金	17,893	30,735	▲12,842
物価高騰対応重点支援地方創生臨時交付金	10,121	-	10,121
デジタル基盤改革支援補助金	5,163	-	5,163

## (7) その他 (3.9兆円)

その他は、上記の各所管を除く、農林水産省の2.3兆円(▲0.3兆円)、外務省の0.6兆円(▲0.1兆円)などの各所管の合計額となります。

名称	R5	R4	増減
水田活用直接支払交付金(農林水産省)	3,892	3,228	664
農業経営安定事業生産条件不利補正対策交付金(農林水産省)	1,926	2,118	▲192
政府開発援助経済開発等援助費(外務省)	1,848	2,745	▲898

### 3. 資産・負債差額の増減要因

➤ **令和5年度末の「資産・負債差額」は▲695.7兆円(対前年度末比+6.3兆円)**

- 資産・負債差額は、当年度の超過費用（財源から業務費用を控除した額）が▲19.0兆円となったものの、資産評価差額が4.5兆円、為替換算差額が21.3兆円生じたことなどにより、前年度末（▲702.0兆円）からマイナス幅は6.3兆円縮小し、結果として▲695.7兆円となりました。

(単位：兆円)

I 前年度末資産・負債差額	▲702.0
II 本年度業務費用合計	170.4
III 財源	151.3
租税等収入	77.4
社会保険料	59.7
その他	14.3
超過費用（財源(III)－本年度業務費用合計(II)）	▲19.0
IV 資産評価差額	4.5
V 為替換算差額	21.3
VI 公的年金預り金の変動に伴う増減（注1）	▲2.5
VII その他資産・負債差額の増減（注2）	2.0
<b>本年度末資産・負債差額(I～VIIの合計)</b>	<b>▲695.7</b>

#### IV 資産評価差額について

「資産評価差額」が4.5兆円となったのは、出資金について、出資先法人の純資産額増加に伴う評価増（+2.9兆円）や株式の時価評価に伴う評価増（+2.2兆円）が生じた一方、外国為替資金特別会計が保有する外貨証券について、海外金利の上昇を受けた債券価額の下落による評価減（▲1.2兆円）が生じたことなどによるものです。

#### V 為替換算差額について

「為替換算差額」が21.3兆円となったのは、為替換算（令和4年度末1ドル130円→令和5年度末1ドル147円）により、外国為替資金特別会計が保有する外貨証券の為替換算差益（+17.9兆円）や外貨預け金の為替換算差益（+2.1兆円）が生じたことなどによるものです。

#### ※資産・負債差額について

- 国の会計においては、企業会計と異なり、株主の持分としての「資本（株主資本）」という概念がないこと等から、「純資産の部」ではなく「資産・負債差額の部」として整理しています。
- この資産・負債差額については、資産・負債差額増減計算書において増減要因を開示しています。

(注1) 年金給付財源（現金・預金、運用寄託金等）が増えたことに伴う預り金（負債）の増加を反映したものです。

(注2) 地方公共団体からの公共用財産の受入（補助事業分）、過年度の誤謬訂正等を反映したものです。

# 資産・負債差額の増減要因(過去からの累積額)

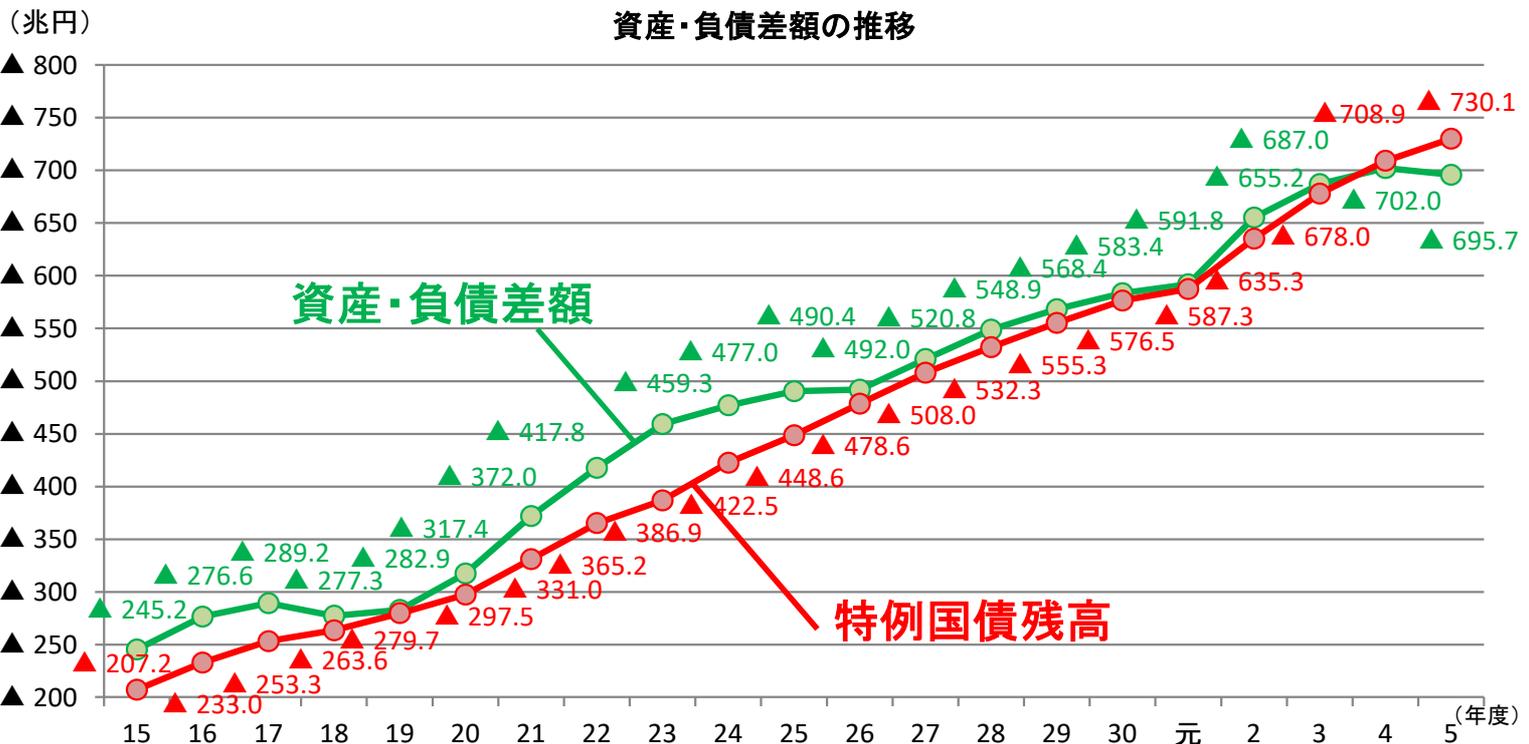
- ◇ 令和5年度末における資産・負債差額は▲695.7兆円となっており、国の財務書類の作成初年度（平成15年度）期末時点での資産・負債差額▲245.2兆円から約2.8倍の水準となりました。
- ◇ 平成16年度から令和5年度における資産・負債差額の変動額の合計▲450.6兆円は、過去の超過費用の累積（▲567.0兆円）などによるものです。

## 資産・負債差額の増減要因(過去からの累積額)

(単位:兆円)

資産・負債差額の構成要素	平成15年度末	平成16年度～令和4年度 における変動額	令和4年度末	令和5年度 における変動額	令和5年度末
	作成初年度貸借対照表 資産・負債差額(A)	▲ 245.2	-	▲ 245.2	-
変動額計(B)	-	▲ 456.9	▲ 456.9	6.3	▲ 450.6
超過費用(財源-業務費用)	-	▲ 548.0	▲ 548.0	▲ 19.0	▲ 567.0
資産評価差額	-	19.4	19.4	4.5	23.8
為替換算差額	-	27.2	27.2	21.3	48.5
公的年金預り金の 変動に伴う増減	-	27.0	27.0	▲ 2.5	24.5
その他資産・負債差額の増 減	-	17.6	17.6	2.0	19.6
資産・負債差額(A+B)	▲ 245.2	-	▲ 702.0	-	▲ 695.7

- ◇ 資産と負債の差額である資産・負債差額については、その大部分が過去における超過費用の累積であることから、概念的には、将来への負担の先送りである特例国債の残高に近いものとなります。
- ◇ 令和5年度は、資産・負債差額のマイナス幅が縮小し、これまでの資産・負債差額と特例国債残高の関係性に変化がみられました。これは主に円安の進行により為替換算差額が生じたことによるものですが、超過費用の発生が続く状況では不足する財源を特例国債等により手当するため、資産・負債差額は特例国債の残高に近いものとなることには変わりありません。



## 4. 財務状況の推移

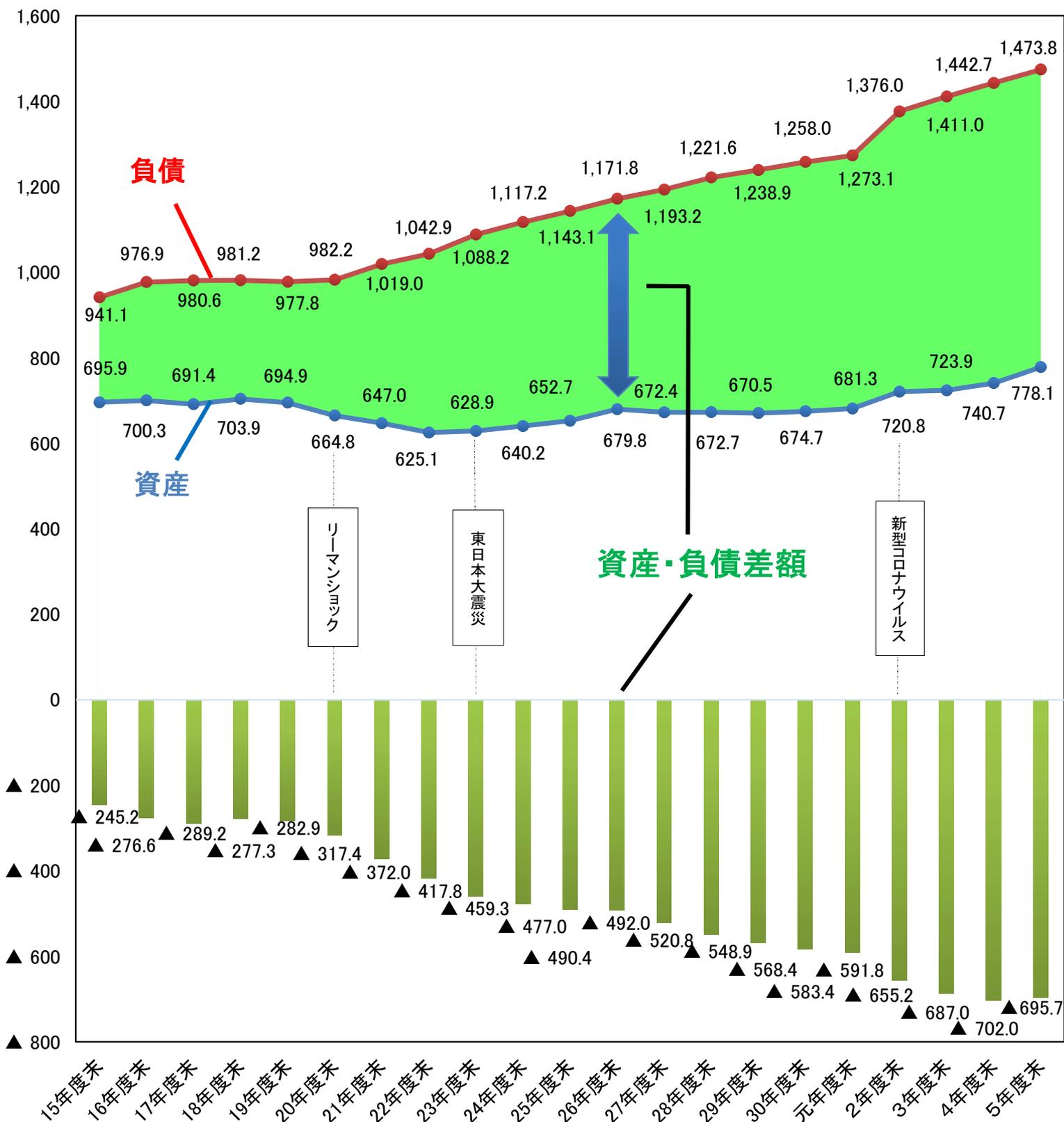
### (1) ストック(資産・負債)及びフロー(費用・財源)の推移

#### ストック

##### ➤ ストック(資産・負債)の推移

- 国の財務書類作成初年度の平成15年度末以降で見ると、資産は平成15年度末695.9兆円から令和5年度末778.1兆円へと大きな増加とはなっていないものの、負債は公債残高の累増により平成15年度末941.1兆円から令和5年度末1,473.8兆円へと増加し続けており、資産・負債差額は450.6兆円の悪化となっています。

(兆円)

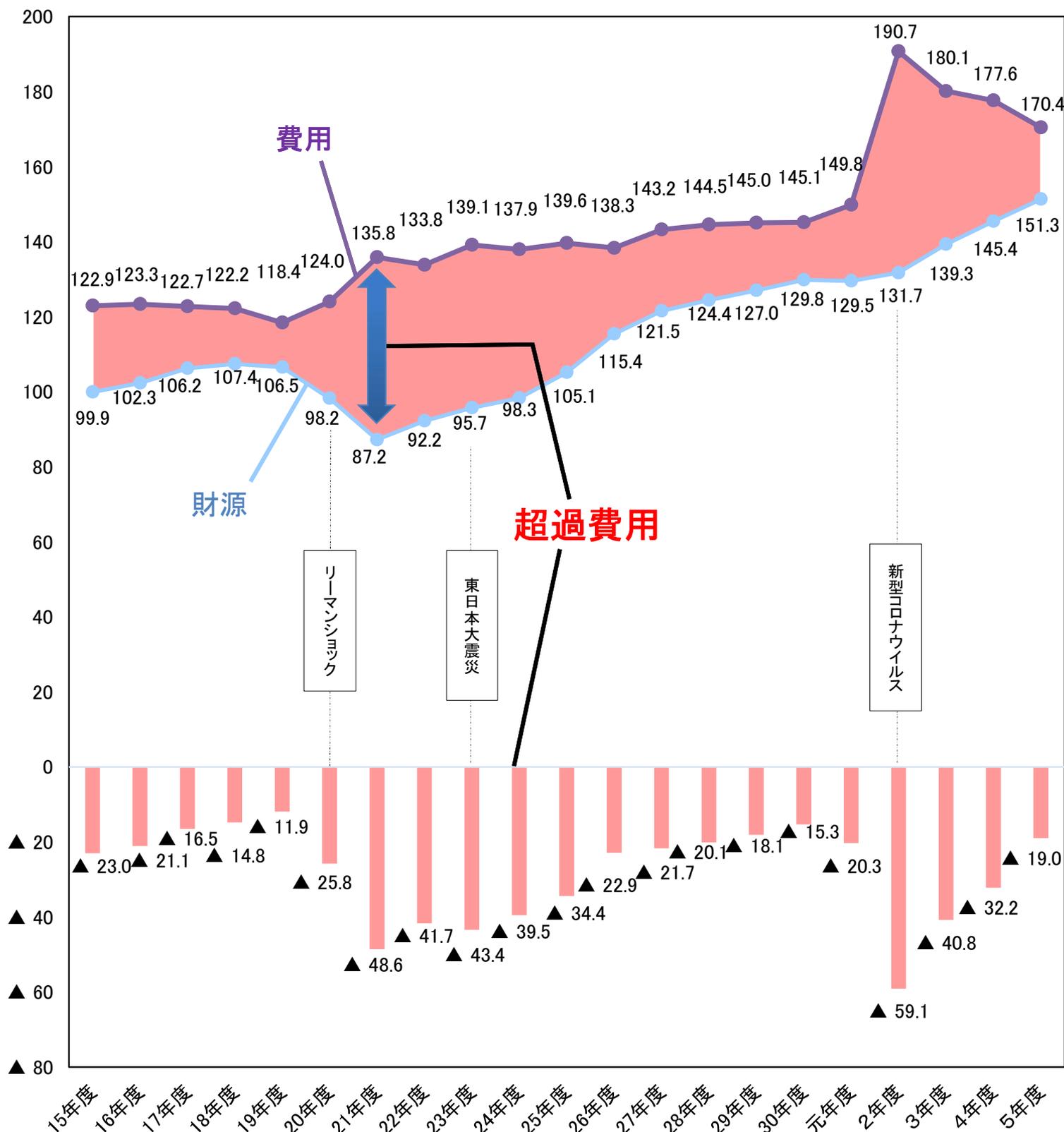


# フロー

## ➤ フロー（費用・財源）の推移

- ・超過費用は、平成20年度のリーマンショックの影響により平成21年度に一時大きく増加し、その後は減少傾向にありましたが、令和2年度に新型コロナウイルス感染症拡大の影響により再び大きく増加しました。令和3年度以降は費用が減少傾向にあるとともに財源が増加傾向にあるため、結果として令和5年度の超過費用は令和元年度と同水準となりました。ただし、費用の水準は新型コロナウイルス感染症拡大前の水準を依然として上回っています。

(兆円)



## (2) ストック(資産・負債)の科目別内訳の推移

### 資産

#### ➤ 資産合計は、平成25年度末比で125.4兆円の増加

- 現金・預金、有価証券、出資金などが平成25年度末から増加している一方、財政融資資金等の貸付金が令和元年度末までは減少傾向にあったことなどにより、資産全体としては緩やかに増加しています。

#### ➤ 現金・預金は、平成27年度末以降50兆円前後で推移

- 現金・預金は、平成27年度以降はマイナス金利の影響により日本銀行への貸付け（日銀現先）を行っていなかったことなどにより増加傾向（平成27年度末に大きく増加）にあり、50兆円前後で推移していました。
- 令和2年度末は新型コロナウイルス感染症対策に係る一部の事業の翌年度繰越額が大きかったこと、令和5年度末は前倒債の発行額が前年度よりも増加したことなどから、大きく増加しました。

#### ➤ 有価証券は、為替相場の動向等に大きく影響される

- 有価証券は、その大半が外国為替資金特別会計において保有する外貨証券であり、為替相場の変動に伴う為替換算等により残高が大きく増減します。
- 外貨証券の残高は、平成25年度末以降、概ね120兆円前後で推移していましたが、近年は為替相場が円安に推移し、令和5年度末には141.0兆円となっています。

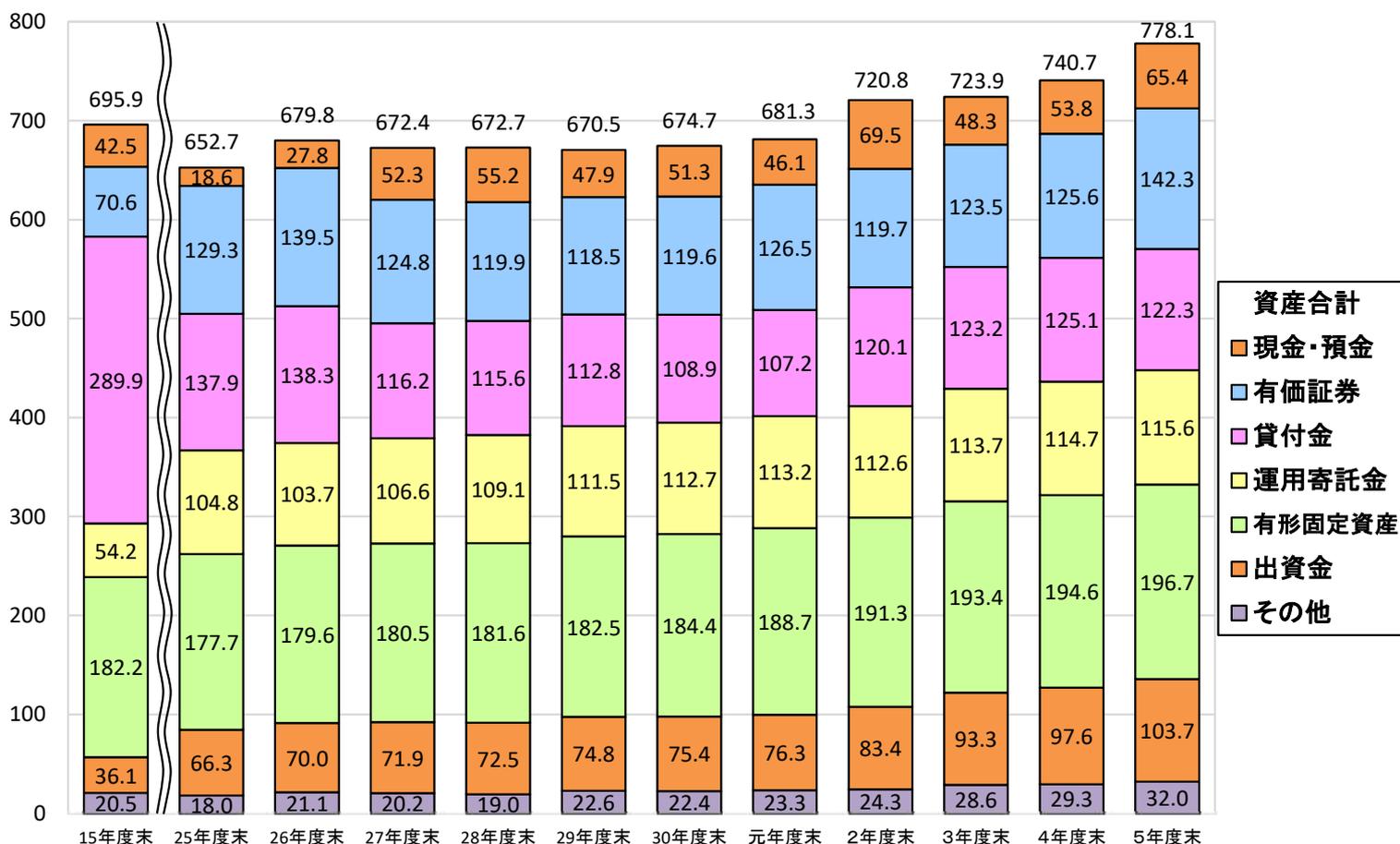
#### ➤ 運用寄託金は、平成27年度末以降は増加傾向

- 運用寄託金は、平成21年度以降は国民年金及び厚生年金の給付のため取り崩したことにより平成26年度末まで減少していましたが、共済年金が厚生年金に一元化された平成27年度末以降は、厚生年金保険料の増加等により増加傾向となっています。

#### ➤ 出資金は、平成25年度末比で37.4兆円の増加

- 出資金は、純資産額の増加や出資先法人の株価の上昇等により年々増加しています。なお、令和2、3年度末は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けた中小事業者等の資金繰り支援のための（株）日本政策金融公庫への出資金が増加したことなどにより、大きく増加しました。

(兆円)



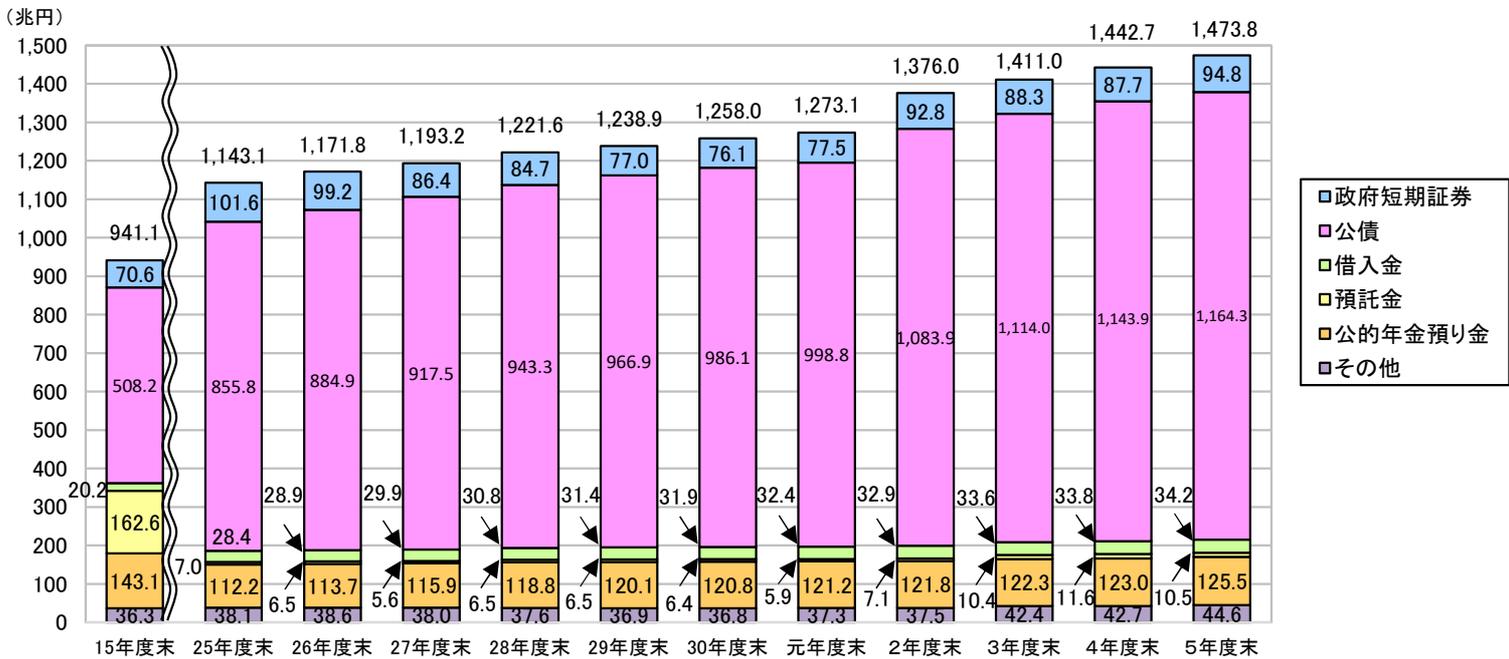
# 負債

## ➤ 負債合計は、平成25年度末比で330.8兆円の増加

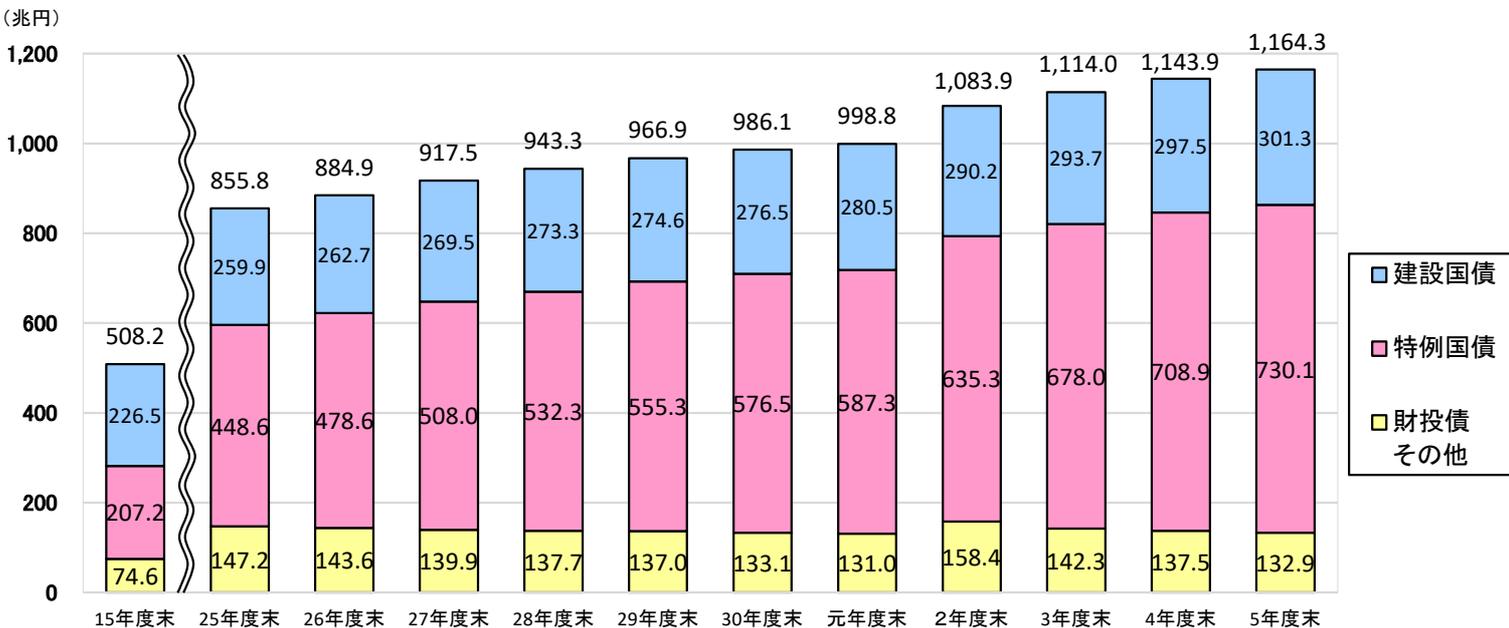
- 負債は増加し続けており、特に公債は、平成25年度末から令和5年度末までの10年間で308.5兆円の増加（平成25年度末855.8兆円から令和5年度末1,164.3兆円）となっています。

## ➤ 公債のうち特例国債は、平成25年度末比で281.5兆円の増加

- 公債の内訳をみると、平成25年度末から令和5年度末までの10年間で、建設国債が41.3兆円の増加（平成25年度末259.9兆円から令和5年度末301.3兆円）となっているのに対し、特例国債は近年の財源不足を受けて281.5兆円の増加（平成25年度末448.6兆円から令和5年度末730.1兆円）となっており、その急激な増加の状況がうかがえます。
- 財投債については、令和元年度末までは財政融資資金貸付金の貸付規模が減少傾向となっていました。令和2年度末に新型コロナウイルス感染症への対応による貸付規模の増加に伴い増加となりました。10年間では9.7兆円の減少（平成25年度末104.2兆円から令和5年度末94.5兆円）となっています。
- なお、公債の償還に関しては、P25「公債残高及び償還について」をご参照ください。



## 【公債の内訳】



(注) 財投債その他の残高は、内部保有による相殺の影響額を含めているため、財投債その他の公債の単純合計額とは一致しません。

### (3) フロー(費用・財源)の科目別内訳の推移

#### 費用

##### ➤ 費用合計は、平成25年度比で30.8兆円の増加

- 費用合計は、高齢化の進行に伴う社会保障に係る費用の増加などにより、平成25年度から令和元年度までは緩やかな増加傾向となっていました。令和2年度及び令和3年度は新型コロナウイルス感染症への対応、令和4年度及び令和5年度は物価高騰への対応等により補助金・交付金等が大きく増加したことから、新型コロナウイルス感染症が拡大する前の令和元年度を大きく上回る水準で推移しています。なお、費用の過半を占めている社会保障に係る費用は、平成25年度比で19.8兆円増加しています。

(参考) 社会保障に係る費用の推移

H25 : 74.2兆円 → R元 : 88.3兆円 (+14.1兆円) → R5 : 94.0兆円 (対R元+5.7兆円、対H25+19.8兆円)

##### ➤ 社会保障給付費は、平成25年度比で5.8兆円の増加

- 社会保障給付費は、年金受給者数の増加等に伴う基礎年金給付費の増加等により、緩やかな増加傾向となっていました。令和2年度は雇用安定等給付費が新型コロナウイルス感染症への対応により大きく増加しました。

##### ➤ 補助金・交付金等は、平成25年度比で25.4兆円の増加

- 補助金・交付金等は、社会保障に係る費用の増加等により、緩やかな増加傾向となっていました。令和2年度及び令和3年度は新型コロナウイルス感染症への対応、令和4年度及び令和5年度は物価高騰への対応等により、令和元年度を大きく上回る水準で推移しています。

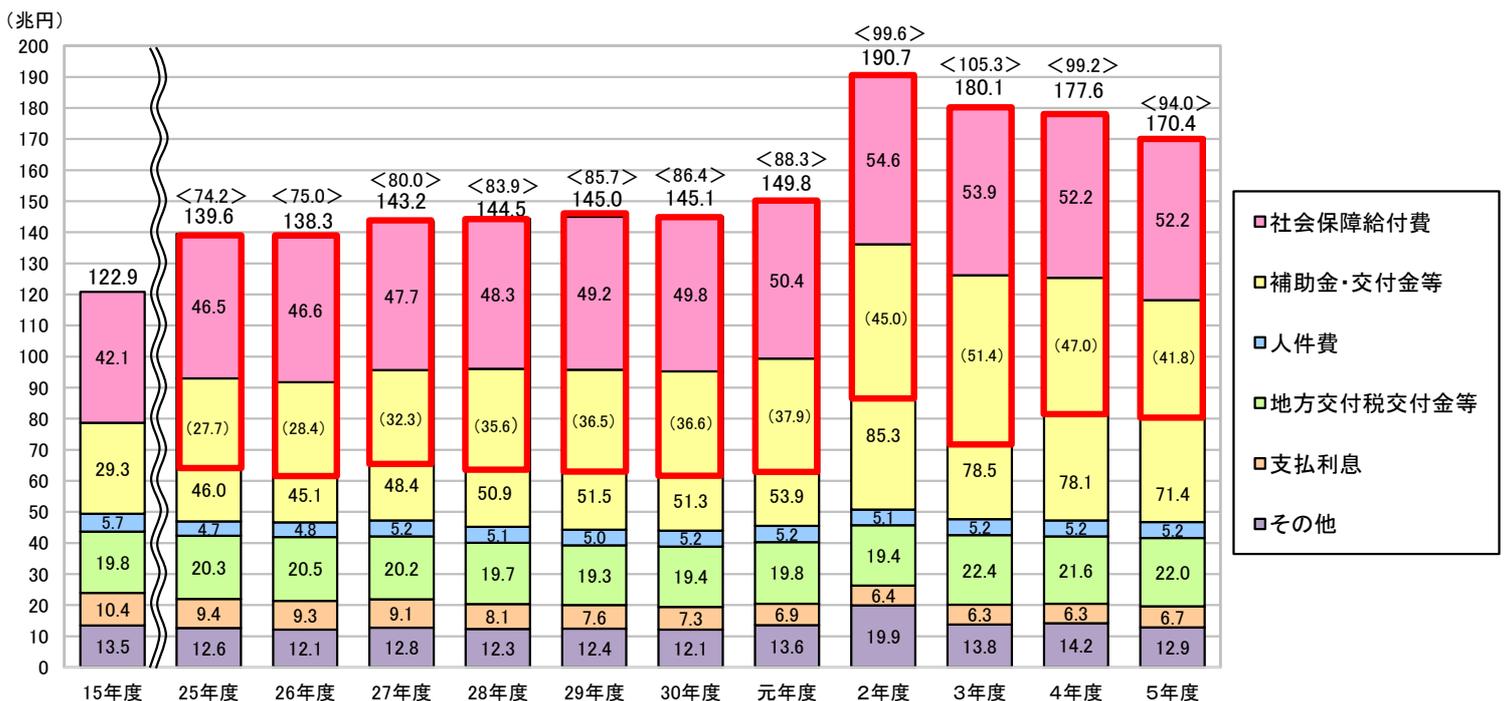
(参考) 「補助金・交付金等」に含まれる社会保障に係る費用の推移

H25 : 27.7兆円 → R元 : 37.9兆円 (+10.1兆円) → R5 : 41.8兆円 (対R元+3.9兆円、対H25+14.0兆円)

##### ➤ 支払利息は、マイナス金利の影響により減少傾向にあったが、令和5年度は微増

- 公債等のオーバー・パー発行に伴う債券の発行額と額面額の差額の償却(支払利息の控除)が続いている中、平均金利(普通国債の利率加重平均:平成25年度末1.15%→令和5年度末0.77%)が低下していたため、支払利息は減少傾向にありました。
- 近年、国債金利が徐々に上昇してきていることに加え、公債残高が年々増加していることから、令和5年度は支払利息が微増しました。

(参考) 公債及び政府短期証券を額面を下回る価額で発行又は上回る価額で発行した場合に生じる債券の発行額と額面額の差額、利息の調整としての性格を有しているため、債券の発行期間にわたって償却をし、その償却額は支払利息(又は支払利息の控除)として計上します。なお、債券の発行額と額面額の差額のうち、令和5年度における償却額(支払利息の控除額)は1.2兆円となっています。



(注1) 社会保障給付費は、厚生・基礎・国民年金給付費や失業等給付費などにより構成されています。  
 (注2) 上記の図の赤枠部分は、社会保障に係る費用を示しており、<>内の数字はその全体額を表しています。  
 また、()の数字は、「補助金・交付金等」に含まれる社会保障に係る費用を表しています。  
 (注3) 平成15年度は、社会保障に係る費用の金額を集計していないため、表示していません。

# 財 源

## ➤ 財源合計は、平成25年度比で46.2兆円の増加

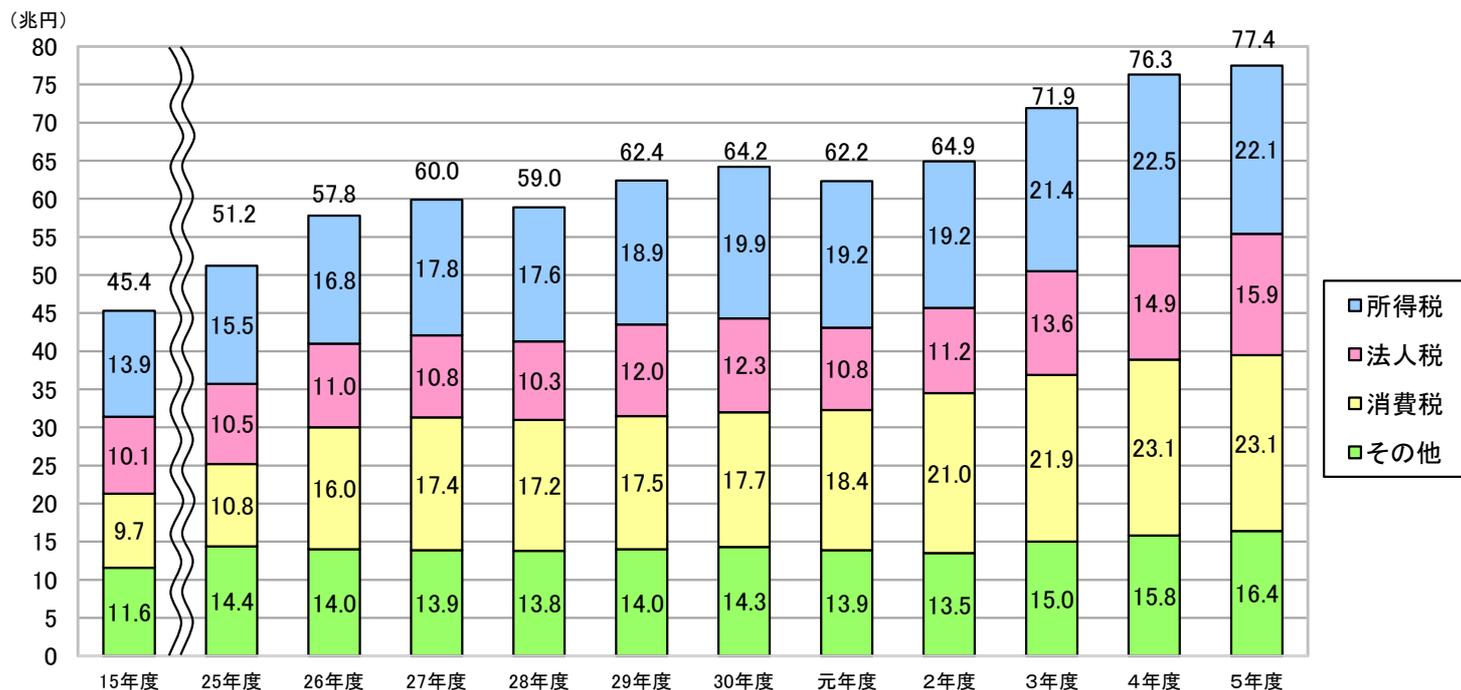
- ・財源合計は、平成25年度以降、消費税などの租税等収入の増加や年金制度改正に基づき平成16年から平成29年9月まで保険料率が段階的に引き上げられ、近年は被保険者数等の増加により社会保険料が増加傾向にあり、全体として年々増加しています。

## ➤ 租税等収入は、平成25年度比で26.2兆円の増加

- ・租税等収入は、基幹3税の所得税、法人税及び消費税は平成25年度と比べてそれぞれ6.5兆円、5.4兆円、12.3兆円増加しています。特に消費税は、消費税率が平成26年度に5%から8%に、また令和元年度に8%から10%にそれぞれ引き上げられたことなどにより、大幅に増加しています。



## 【租税等収入の内訳】



## (4) 国の資産をどう見るか

### > 資産と負債の対応関係

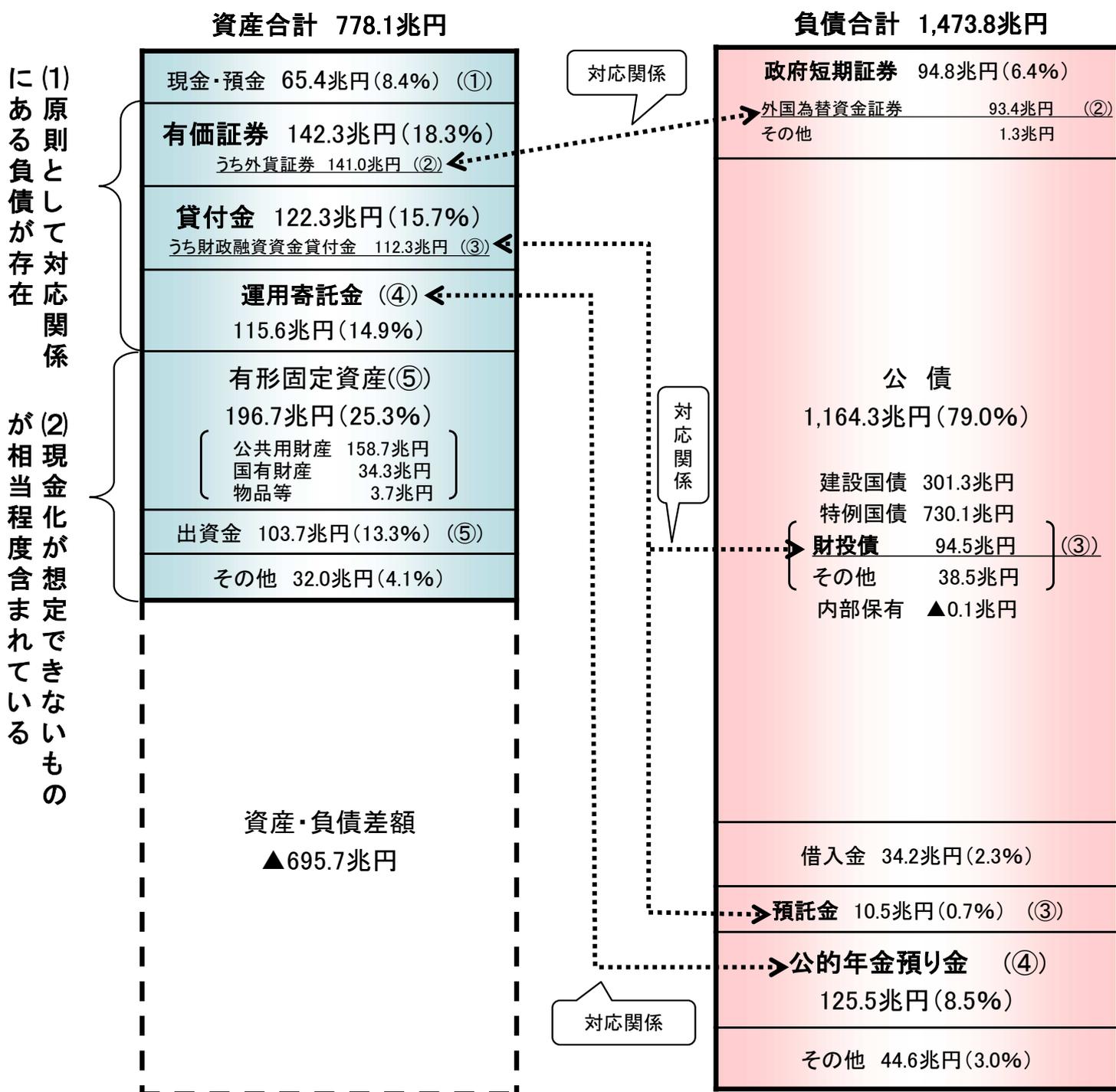
・令和5年度末において資産は778.1兆円計上されていますが、その大半は財源確保のために売却処分したり、換金して他の財源に充てることができないものとなっています（下図及び次頁をご参照ください。）。

(1) 資産、負債の科目の中には運用資産と調達財源がほぼ連動しているものがあります。

- 外貨証券(141.0兆円)：購入のための財源は、外国為替資金証券(93.4兆円)の発行により調達しています。
- 財政融資資金貸付金(112.3兆円)：貸付けのための財源は、財投債(94.5兆円)の発行により調達された資金や預託金(10.5兆円)で構成されています。
- 運用寄託金(115.6兆円)：将来の年金給付財源として保有している保険料等の積立金の一部であり、見合う金額を公的年金預り金(125.5兆円)として計上しています。

(2) また、売却して現金化することを想定できないものが相当程度含まれています。

- 有形固定資産(196.7兆円)：道路や河川といった公共用財産等
- 出資金(103.7兆円)：独立行政法人の出資金や政策的に国に保有義務のある株式等



## 各科目の特徴及び留意点

- ◇ 「国の財務書類」は、企業会計の考え方及び手法を参考として作成していますが、各計算書に表示されている科目の中には、国の財政・会計制度の下で国の財政活動の特性を踏まえた整理を行っているものがあります。
- ◇ 貸借対照表に計上されている資産については、見合いの負債を有する資産や売却処分して現金化することが想定できない資産が相当程度含まれているため、国の負債規模、諸外国の財務状況との比較においては、以下の貸借対照表に計上されている主な科目の特徴及び留意点を考慮する必要があります。前頁の図もご参照ください。

### ① 令和5年度末の現金・預金（65.4兆円）は、年度末時点の実際の保有残高を表示していません。

国の会計においては、当該年度の収入支出を整理する期間（出納整理期間）があり、貸借対照表に計上されている現金・預金残高の金額は、年度終了後の出納整理期間における現金の受払いを反映したものと なっています。令和5年度末時点の国庫における実際の政府預金残高は15.7兆円（外貨預け金を除く）ですが、出納整理期間は税収等の受け入れが多いため、現金・預金残高は65.4兆円（外貨預け金を除いた現金・預金は45.8兆円）となりました。

### ② 外貨証券（141.0兆円）と外国為替資金証券（93.4兆円）について

有価証券の大部分を占める外貨証券(141.0兆円)については、その取得のため必要となる財源を、主に外国為替資金証券の発行により調達しています。したがって、資産に計上されている当該外貨証券を為替介入（外貨売り・円買い）によって売却した場合の収入は、原則として負債に計上されている外国為替資金証券の償還に充てられるものです。

※外貨証券と外国為替資金証券の差額47.6兆円のうち大部分は、為替相場の変動等に伴い大きく増減する性格を有する外貨証券の為替換算による増価と、一時的に生じている国庫余裕金の繰替使用により外国為替資金証券の発行残高を減少させたことによるものです。

### ③ 財政融資資金貸付金（112.3兆円）と財投債（94.5兆円）等について

貸付金の大部分を占める財政融資資金貸付金（112.3兆円）については、その財源は財投債の発行により調達した資金や預託金で構成されています。したがって、資産に計上されている財政融資資金貸付金の回収金は、原則として負債に計上されている財投債の償還等に充てられるものです。

### ④ 運用寄託金（115.6兆円）と公的年金預り金（125.5兆円）について

運用寄託金については、将来の年金給付（厚生年金及び国民年金）財源に充てるために保有している保険料等の積立金の一部であり、運用寄託金等に見合う負債を公的年金預り金として計上しています。

### ⑤ 有形固定資産（196.7兆円）、出資金（103.7兆円）などの計上額について

有形固定資産、出資金などについては、道路や河川といった固定資産（公共用財産）や独立行政法人などへの出資金など政策目的で保有しており、売却処分して現金化することが想定できないものが相当程度含まれています。また、公共用財産の資産計上額は、過去の用地費や事業費を累計することにより取得原価を推計した価額から減価償却相当額を控除する方法などによって算出しており、現金による回収可能額を表すものではありません。

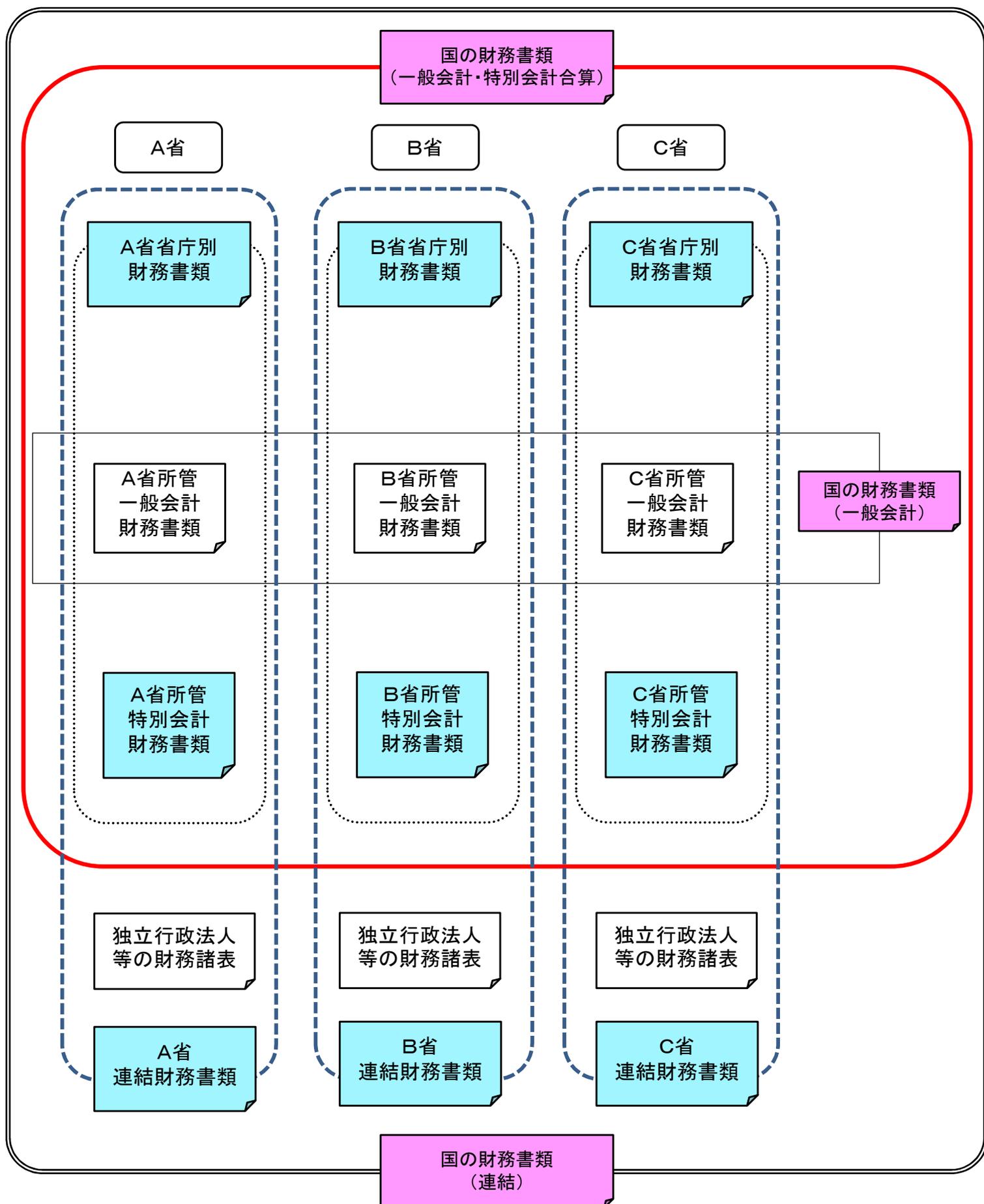
### ※ 資産・負債差額（▲695.7兆円）について

資産と負債の差額である資産・負債差額（▲695.7兆円）については、その大部分が過去における超過費用の累積であることから、概念的には、将来への負担の先送りである特例国債の残高に近いものとなります。

## 【参考】

### (1) 国の財務書類の構成

- ◇ 国の財務書類は、一般会計と特別会計を合算した国全体の財務書類です。
- ◇ このほか、一般会計のみの財務書類、特別会計ごとの財務書類も作成しています。
- ◇ また、省庁ごとの財務書類、独立行政法人などを連結した連結財務書類も作成しています。



# 省庁別財務書類の作成単位

◇ 国の財務書類は、各省庁が作成した省庁別財務書類を基礎として作成しています。省庁別財務書類は、一般会計の所管単位で作成され、各所管に属する特別会計は、次のとおりです。

一般会計所管	特別会計
皇室費	
国会	
裁判所	
会計検査院	
内閣	東日本大震災復興特別会計
内閣府	交付税及び譲与税配付金特別会計 <sup>(注1)</sup> エネルギー対策特別会計(電源開発促進勘定) <sup>(注2)</sup> 年金特別会計(子ども・子育て支援勘定) <sup>(注3)</sup> 東日本大震災復興特別会計
デジタル庁	
(復興庁) <sup>(注4)</sup>	東日本大震災復興特別会計
総務省	交付税及び譲与税配付金特別会計 <sup>(注1)</sup> 東日本大震災復興特別会計
法務省	東日本大震災復興特別会計
外務省	
財務省	地震再保険特別会計 国債整理基金特別会計 外国為替資金特別会計 財政投融资特別会計 東日本大震災復興特別会計
文部科学省	エネルギー対策特別会計(電源開発促進勘定) <sup>(注2)</sup> 東日本大震災復興特別会計
厚生労働省	労働保険特別会計 年金特別会計 <sup>(注3)</sup> 東日本大震災復興特別会計
農林水産省	食料安定供給特別会計 国有林野事業債務管理特別会計 東日本大震災復興特別会計
経済産業省	エネルギー対策特別会計 <sup>(注2)(注5)</sup> 特許特別会計 東日本大震災復興特別会計
国土交通省	自動車安全特別会計 東日本大震災復興特別会計
環境省	エネルギー対策特別会計(エネルギー需給勘定・電源開発促進勘定) <sup>(注2)(注5)</sup> 東日本大震災復興特別会計
防衛省	東日本大震災復興特別会計

(注1) 交付税及び譲与税配付金特別会計については、内閣府及び総務省の所掌事務により会計を区分して財務書類を作成しています。

(注2) エネルギー対策特別会計の電源開発促進勘定については、内閣府、文部科学省、経済産業省及び環境省の所掌事務により勘定を区分して財務書類を作成しています。

(注3) 年金特別会計の子ども・子育て支援勘定については、内閣府及び厚生労働省の所掌事務により勘定を区分して財務書類を作成しています。

(注4) 復興庁については、平成25年度以降一般会計予算が措置されていないことから、東日本大震災復興特別会計財務書類(復興庁所管分)を省庁別財務書類としています。

(注5) エネルギー対策特別会計のエネルギー需給勘定については、経済産業省及び環境省の所掌事務により勘定を区分して財務書類を作成しています。

## (2) 令和5年度国の「歳入歳出決算」と「財務書類」について

### 国の歳入歳出決算(現金主義)と財務書類(発生主義)の関係

#### 国の歳入歳出決算について

- ◇ 国の歳入歳出決算は、一般会計及び特別会計について、一会計期間における一切の収入(歳入)及び支出(歳出)の実績を示すものです。

#### 純計について

- ◇ 「純計」とは、一般会計及び特別会計の歳入歳出額の単純合計額から会計相互間等の重複額を控除し、また、国債整理基金特別会計における借換えのための公債金収入額及び借換償還額を控除したもので、国の実質上の財政規模を示すものです。

### 令和5年度歳入歳出決算

(単位：兆円)

	歳入	歳出	差額 (注1)
一般会計	140.2	127.6	12.6
13特別会計合計 (注2)	428.3	412.5	15.7
合計 (一般会計+特別会計)	568.5	540.1	28.4
重複分及び借換債控除	294.1	291.3	2.8
純計 (一般会計+特別会計)	<b>274.3</b>	<b>248.8</b>	25.5

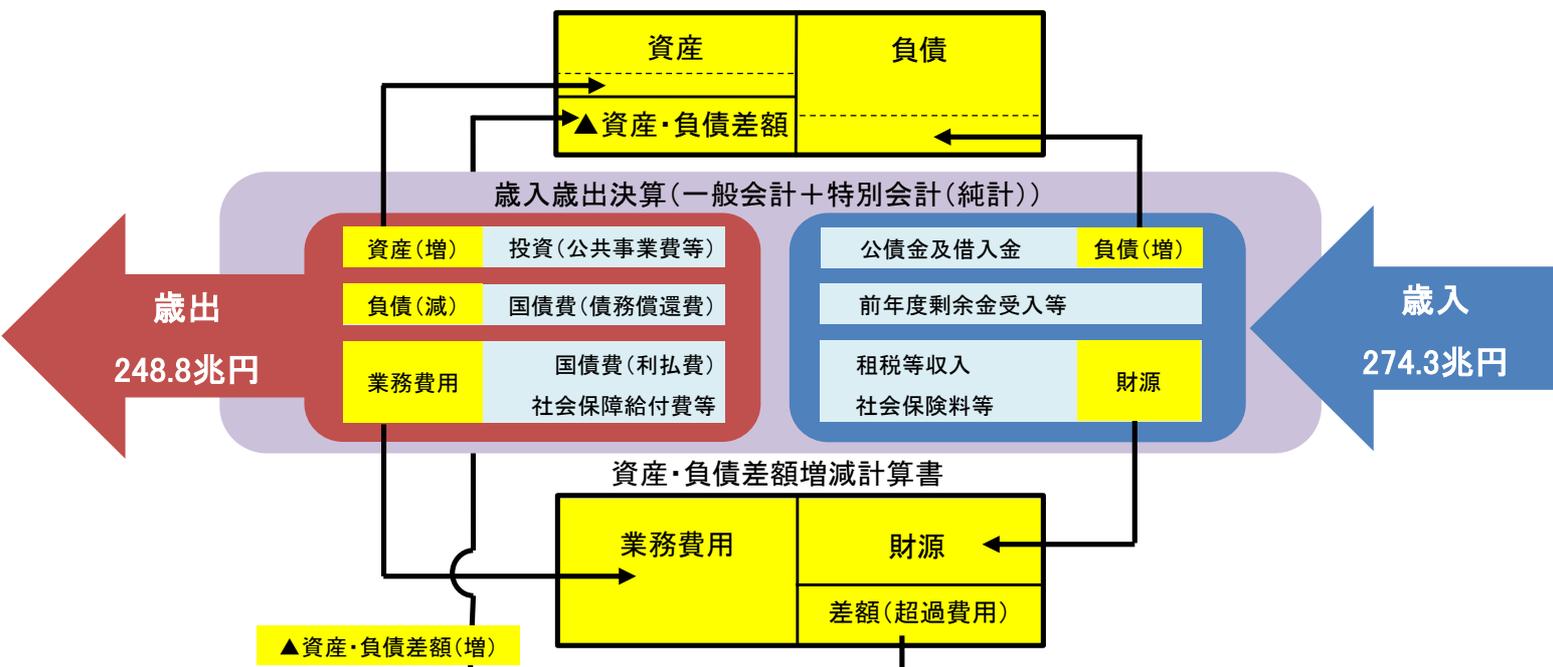
(注1) 差額は決算上の剰余金であり、一般会計では翌年度への繰越歳出予算の財源に充てられる額(11.1兆円)などが含まれています。また、各特別会計では当該特別会計の積立金への積立て等の処理が行われます。

(注2) 令和5年度において設置されている特別会計は、以下のとおりです。

- ・交付税及び譲与税配付金特別会計
- ・地震再保険特別会計
- ・国債整理基金特別会計
- ・外国為替資金特別会計
- ・財政投融资特別会計
- ・エネルギー対策特別会計
- ・労働保険特別会計
- ・年金特別会計
- ・食料安定供給特別会計
- ・国有林野事業債務管理特別会計
- ・特許特別会計
- ・自動車安全特別会計
- ・東日本大震災復興特別会計

### 歳入歳出決算(純計)と財務書類の関係

#### 貸借対照表



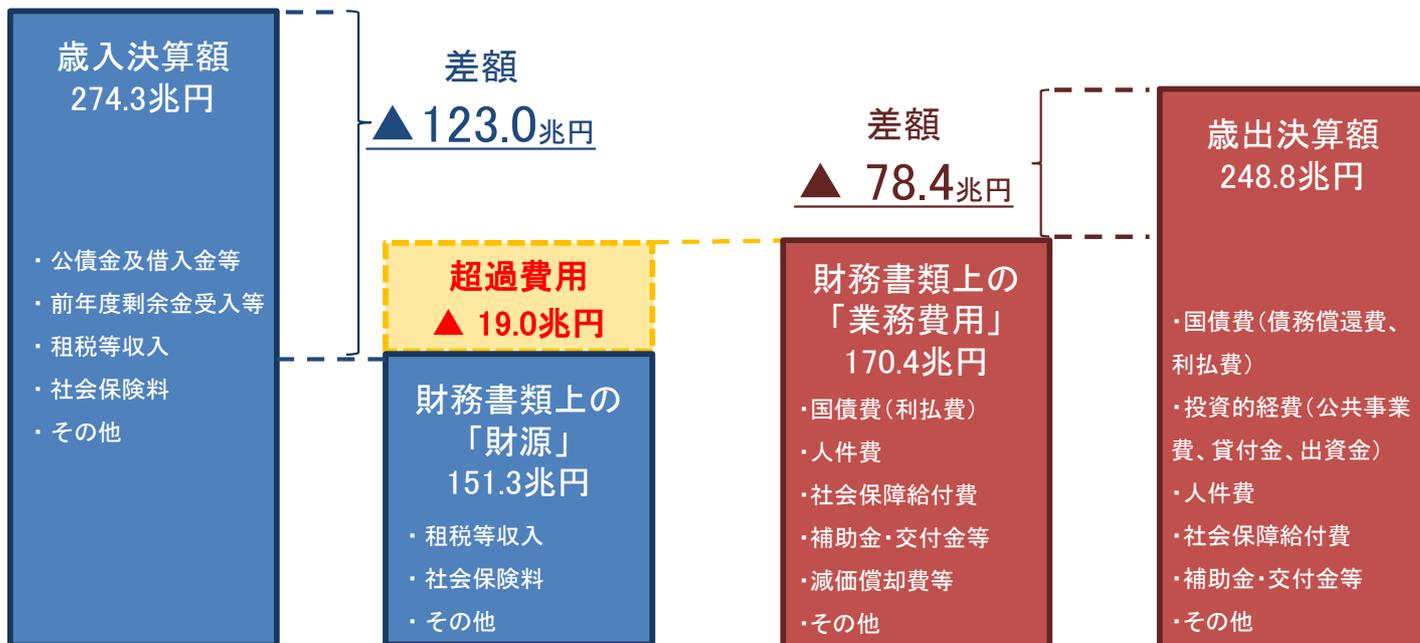
# 国の歳入歳出決算額(純計)と財務書類の財源・業務費用との相違

## 収入：歳入決算額(純計)と財務書類上の「財源」の違い

- ◇ 財務書類上の「財源」は、歳入決算額から企業会計上の収益に該当しないもの(公債金及借入金等、前年度剰余金受入等)を控除しています。

## 支出：歳出決算額(純計)と財務書類上の「業務費用」の違い

- ◇ 財務書類上の「業務費用」は、歳出決算額から企業会計上の費用に該当しないもの(国債費(債務償還費)、投資的経費(公共事業費、貸付金、出資金)等)を控除しているほか、現金支出を伴わない減価償却費や引当金繰入額などが計上されています。



### 差額の主な内訳

#### ○公債金及借入金等(▲80.3兆円)

公債金(39.5兆円)、借入金等(40.7兆円)は、負債の増加というストックの変動であるため、収益には該当しません(公債金の額は、公債の発行収入193.5兆円から借換えのための公債金収入額153.9兆円を控除後)。

#### ○前年度剰余金受入(▲30.0兆円)

前年度剰余金受入は、既に国の内部で保有している剰余金を計上するものであるため、収益には該当しません。

#### ○資金等より受入(▲12.4兆円)

資金や積立金等からの受入は、国の内部における資金移動であるため、収益には該当しません。

### 差額の主な内訳

#### ○債務償還費(▲68.2兆円)

公債金、借入金等の元本部分の返済支出である債務償還費(公債金27.5兆円、借入金等40.7兆円)は、負債の減少というストックの変動であるため、費用には該当しません(公債金の額は、公債の償還額181.4兆円から借換償還額153.9兆円を控除後)。

#### ○財政融資資金への繰入(▲3.0兆円)

財政融資資金への繰入は、国の内部における資金移動であるため、費用には該当しません。

#### ○資産を形成する投資的経費(▲6.0兆円)

投資的経費のうち、公共用財産など施設整備に係る支出(5.3兆円※)や出資金(0.6兆円)、貸付金(0.1兆円)は、ストックの変動であるため、費用には該当しません。

(※) 物品等の支出を除く。

#### ○減価償却費(+5.6兆円)

現金支出を伴わない公共用財産などの固定資産に係る減価償却費は、費用として計上しています。

(注1) 歳入歳出決算額及び財務書類の内訳は、双方の比較のため、便宜上、実際の科目等とは異なる名称で例示しているものがあります。

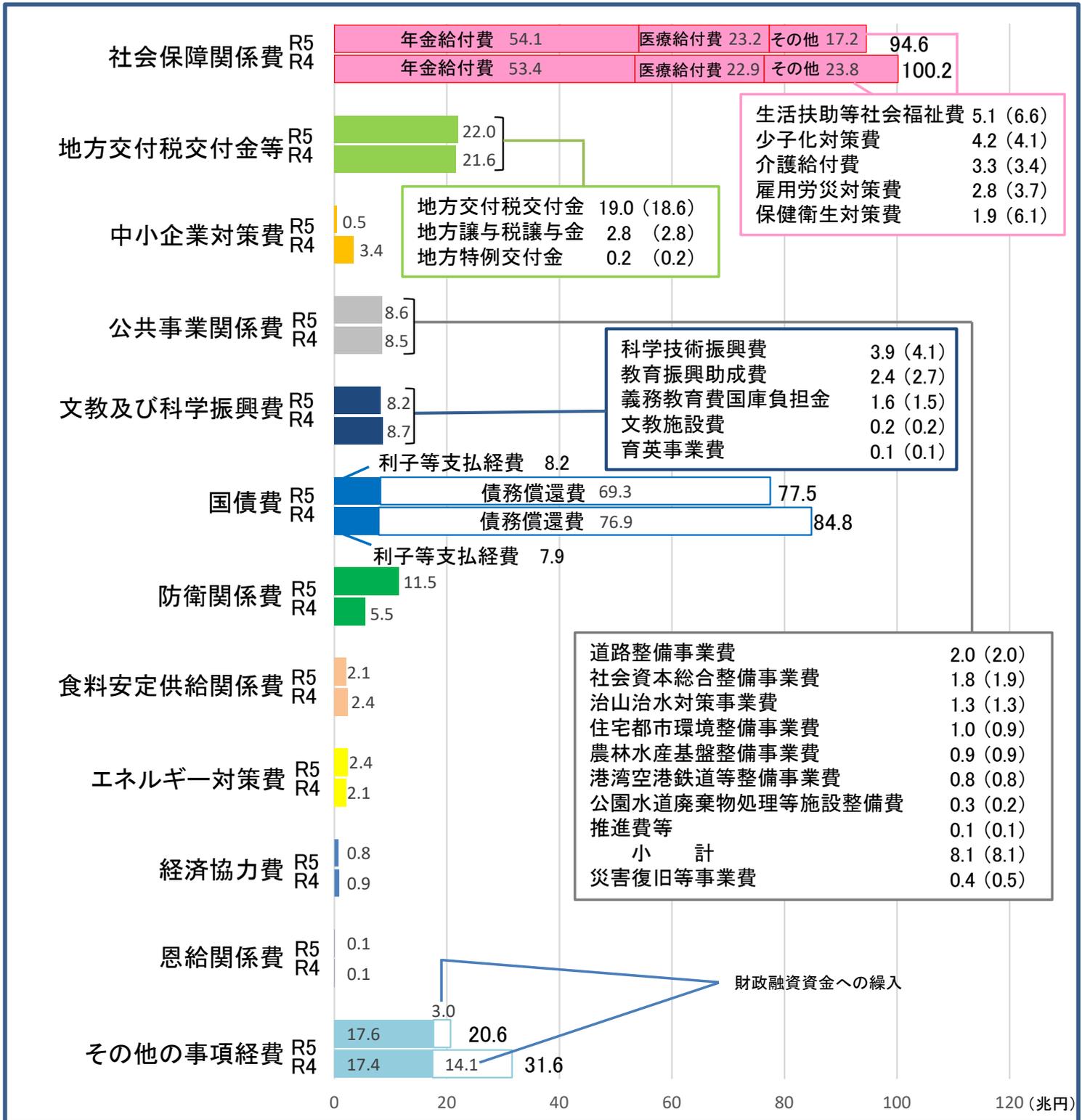
(注2) 財務書類の財源と業務費用の差額はマイナス(超過費用)となっていますが、これは企業会計の考え方で見ると「当期純損失」(いわゆる赤字決算)であるということを示しています。

### (3) 主要経費別分類で見る国の歳出決算額(純計)について

- ◇ 国の歳出決算では、その年度の政府に要請された諸施策にいかにより配分されたかを端的に示すものとして、社会保障関係費や国債費などの主要経費別分類により表示しています。
- ◇ 令和5年度における歳出決算額(純計) 248.8兆円を主要経費ごとに分類すると下図のとおりですが、年金給付費や医療給付費などの社会保障関係費が94.6兆円と全体の約4割を占めています(なお、参考として、下図グラフの下段及び( )には令和4年度の歳出決算額(純計)を記載しています。)

歳出決算主要経費別純計

上: 令和5年度 合計 248.8兆円  
下: 令和4年度 合計 269.8兆円



(注1) 上図の経費の名称は、経費の内容を表すため、便宜上、実際の主要経費とは異なる名称で例示しているものがあります。  
 (注2) 財務書類上の業務費用では企業会計上の費用に該当しないものを控除しているため、上図の債務償還費や財政融資資金への繰入のほか、資産を形成する投資的経費(公共事業費、出資金、貸付金)が除かれ、また、現金支出を伴わない減価償却費や引当金繰入額などが計上されます(P22参照)。

## (4) 国の財務書類における会計別(一般会計・特別会計)の内訳

- ◇ 資産・負債差額は、一般会計が▲755.8兆円、合算が▲695.7兆円となっており、合算においてマイナスの幅が60.1兆円小さくなっています。超過費用は、一般会計が▲21.0兆円、合算が▲19.0兆円となっており、合算においてマイナスの幅が2.0兆円小さくなっています。
- ◇ これは、特別会計の資産・負債差額及び超過費用がプラスであることによりますが、一般会計、合算ともに資産・負債差額及び超過費用が大幅にマイナスの状態であることには変わりません。

### 貸借対照表

(単位:兆円)

一般会計 特会計 相殺等 合算					一般会計 特会計 相殺等 合算				
<資産の部>					<負債の部>				
現金・預金	21.1	89.0	▲ 44.7	65.4	未払金等	3.0	9.6	▲0.0	12.6
有価証券	0.0	142.4	▲ 0.1	142.3	政府短期証券	—	94.8	—	94.8
未収金等	4.9	7.2	▲0.0	12.1	公債	1,055.8	108.5	▲ 0.1	1,164.3
前払費用	0.0	2.4	▲0.0	2.4	借入金	7.6	40.9	▲ 14.4	34.2
貸付金	3.6	133.1	▲ 14.4	122.3	預託金	—	37.5	▲ 27.0	10.5
運用寄託金	—	115.6	—	115.6	責任準備金	—	9.8	—	9.8
貸倒引当金	▲ 0.1	▲ 1.2	—	▲ 1.3	公的年金預り金	—	125.5	—	125.5
有形固定資産	194.0	2.7	0.0	196.7	退職給付引当金等	5.3	0.2	—	5.5
無形固定資産	0.3	0.2	0.0	0.5	その他の負債	14.0	30.9	▲ 28.1	16.8
出資金	70.1	33.6	—	103.7	<b>負債合計</b>	<b>1,085.8</b>	<b>457.7</b>	<b>▲ 69.7</b>	<b>1,473.8</b>
その他の資産	36.0	20.6	▲ 38.4	18.3	<資産・負債差額の部>				
					<b>資産・負債差額</b>	<b>▲ 755.8</b>	<b>88.0</b>	<b>▲ 27.9</b>	<b>▲ 695.7</b>
<b>資産合計</b>	<b>330.0</b>	<b>545.7</b>	<b>▲ 97.6</b>	<b>778.1</b>	<b>負債及び</b>	<b>330.0</b>	<b>545.7</b>	<b>▲ 97.6</b>	<b>778.1</b>
					<b>資産・負債差額合計</b>				

### 業務費用計算書

(単位:兆円)

### 資産・負債差額増減計算書

(単位:兆円)

一般会計 特会計 相殺等 合算					一般会計 特会計 相殺等 合算				
人件費	5.0	0.2	0.0	5.2	前年度末資産・負債差額	▲ 741.3	58.4	▲ 19.1	▲ 702.0
社会保障給付費	—	51.7	0.5	52.2	本年度業務費用合計	104.4	108.5	▲ 42.6	170.4
補助金・交付金等	48.7	22.7	—	71.4	租税等財源	72.1	5.3	—	77.4
地方交付税交付金等	—	22.0	—	22.0	社会保険料	—	59.7	—	59.7
交付税及び譲与税配付金特別会計への繰入	18.0	0.1	▲ 18.1	—	他会計からの受入	4.9	41.5	▲ 46.4	—
年金特別会計への繰入	13.7	0.0	▲ 13.7	—	その他	6.4	8.3	▲ 0.4	14.3
労働保険特別会計への繰入	0.2	—	▲ 0.2	—	<b>財源合計</b>	<b>83.4</b>	<b>114.7</b>	<b>▲ 46.8</b>	<b>151.3</b>
エネルギー対策特別会計への繰入	1.0	—	▲ 1.0	—	<b>超過費用(財源-費用)</b>	<b>▲ 21.0</b>	<b>6.2</b>	<b>▲ 4.2</b>	<b>▲ 19.0</b>
その他の会計への繰入	0.4	0.6	▲ 1.1	—	資産評価差額	3.4	1.0	▲ 0.0	4.5
減価償却費	5.4	0.2	—	5.6	上記以外 為替換算差額	—	21.3	—	21.3
支払利息	6.3	8.7	▲ 8.3	6.7	公的年金預り金の変動に伴う増減	—	▲ 2.5	—	▲ 2.5
その他	5.6	2.3	▲ 0.6	7.3	その他	3.1	3.5	▲ 4.6	2.0
<b>業務費用合計</b>	<b>104.4</b>	<b>108.5</b>	<b>▲ 42.6</b>	<b>170.4</b>	<b>本年度末資産・負債差額</b>	<b>▲ 755.8</b>	<b>88.0</b>	<b>▲ 27.9</b>	<b>▲ 695.7</b>

## (5) 公債残高及び償還について

- ◇ 令和5年度末において、国の財務書類上の公債残高は1,164.3兆円と巨額に上っており、その内訳は建設国債301.3兆円、特例国債730.1兆円、財投債94.5兆円、その他国債<sup>(注1)</sup> 38.5兆円となりました<sup>(注2)</sup>。
- ◇ これらの公債の後年度の償還予定は下図の償還年次表のとおりですが、償還財源には借換債<sup>(注3)</sup>の発行収入が含まれている点に留意する必要があります。例えば令和6年度は147.9兆円<sup>(注4)</sup>の償還が予定されていますが、同時に借換債134.2兆円の発行が予定されています。

(注1) 国の財務書類のその他国債は、日本国有鉄道清算事業団承継債務借換国債、復興債、GX経済移行債、年金特例国債、原賠機構交付国債等です。

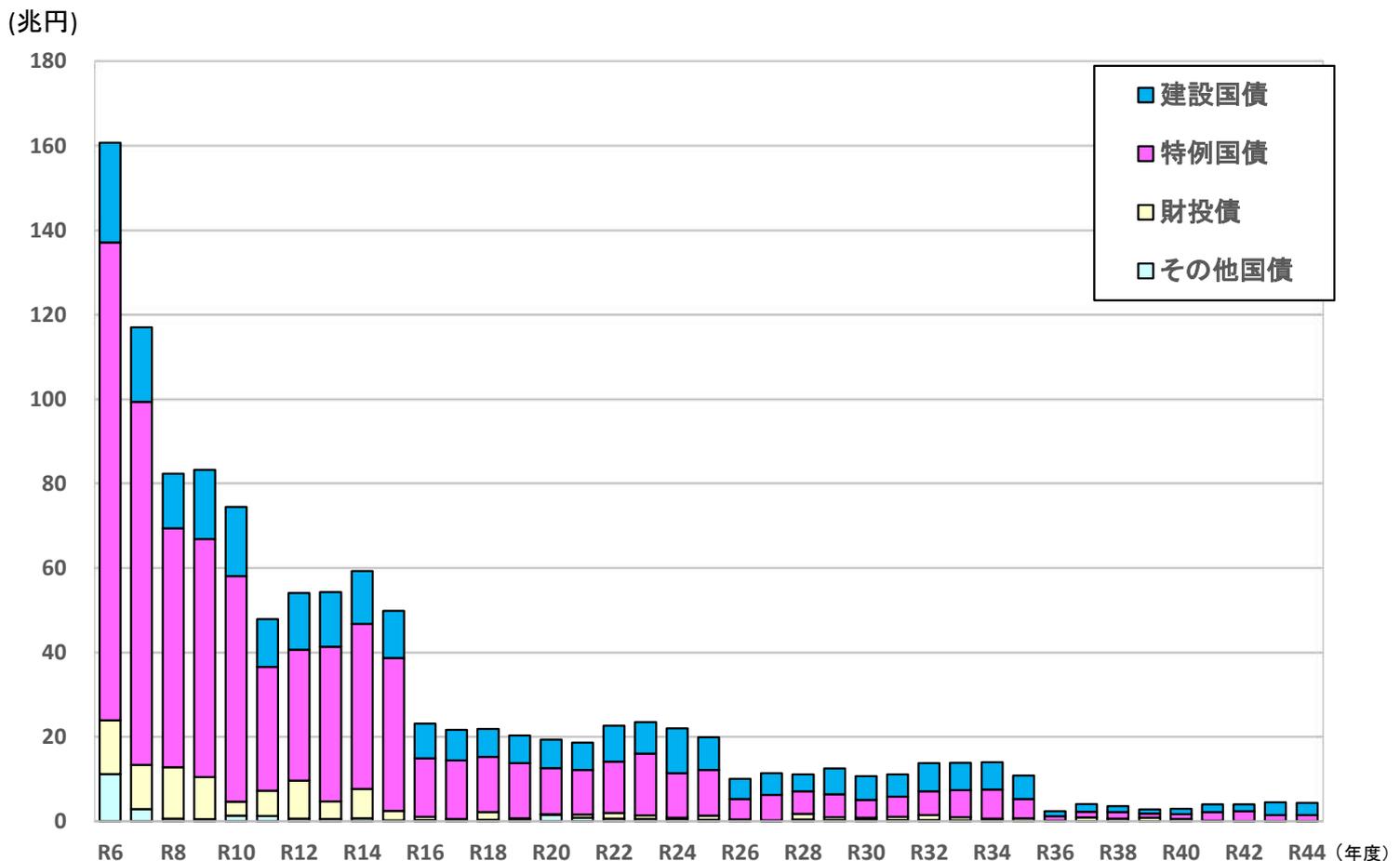
(注2) 公債の内訳は、内部保有による相殺(▲0.1兆円)を反映していないため、内訳の単純合計額は公債残高とは一致しません。

(注3) 国債の償還方法は、現金償還と借換えとに区分され、借換えは、既発の国債の償還財源を調達するために新たな国債(借換債)を発行する方法であり、現金償還は、借換債収入以外の一般の財源により償還する方法です。

(注4) 借換えが認められる国債(建設国債、特例国債、復興債、日本国有鉄道清算事業団承継債務借換国債、減税特例国債等)の令和6年度償還予定額です。

※一般的に公債残高は額面価格で表示されております。一方、国の財務書類上では償却原価法により算定された残高を計上しております。償却原価法とは、国債発行時に発生した額面価格と落札価格の差額を償還日に向けて調整する方法です。

### 償還年次表

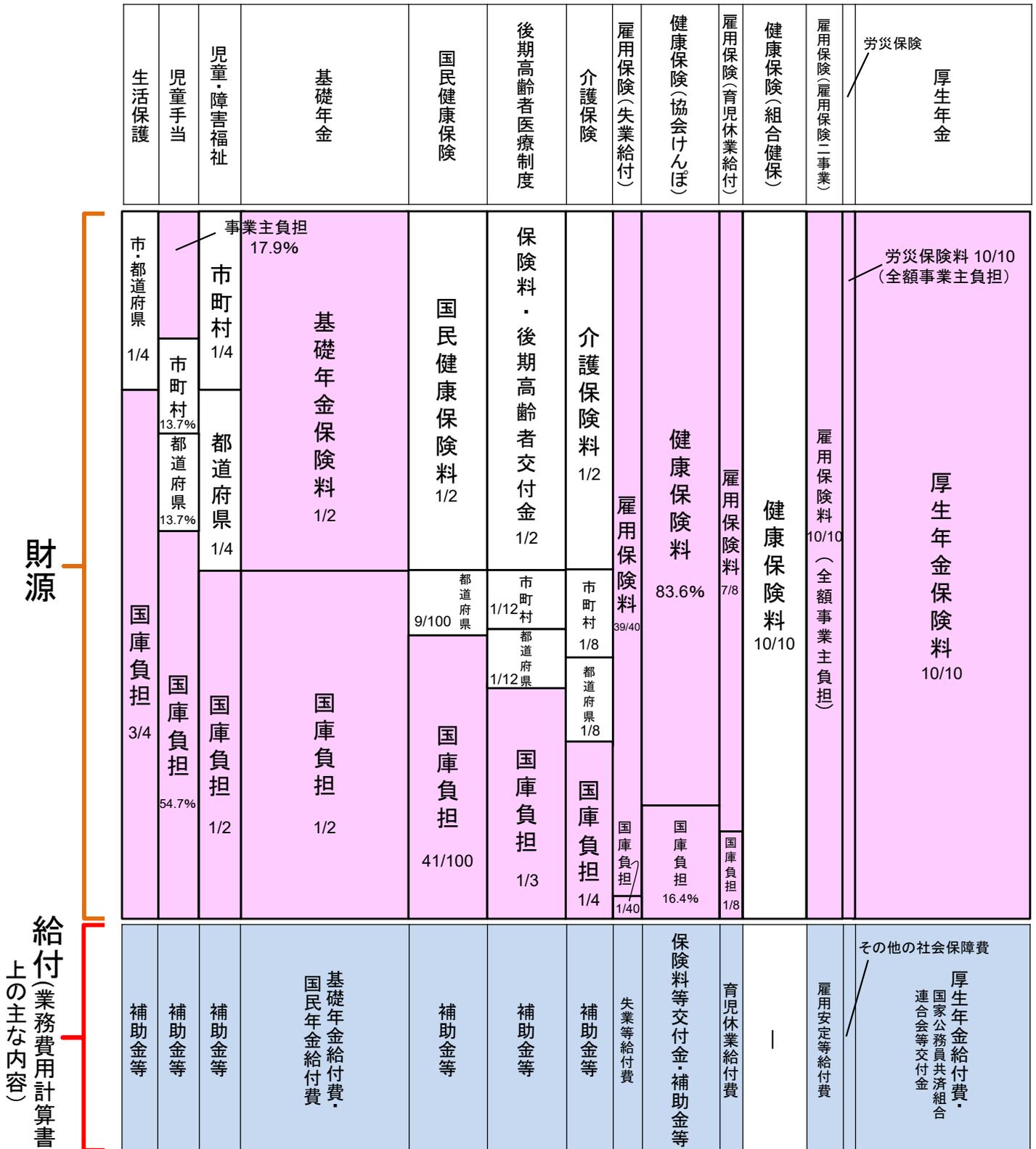


(注) 償還年次表には、要求払いとなる出資国債等、国際通貨基金通貨代用証券、株式会社日本政策投資銀行危機対応業務国債及び原賠機構交付国債は、含まれていません。

# (6) 社会保障財源及び給付の全体像と国の財務書類(一般会計・特別会計)の関係

◇ 国の財務書類(一般会計・特別会計)において社会保障関連で計上されるのは、下図の着色範囲です。

## 我が国の社会保障財源及び給付の全体像と国の財務書類(一般会計・特別会計)の範囲(イメージ)



※ 財源の色塗り(ピンク色)の範囲を国(一般会計及び特別会計)から給付しています。

(注1) 財源の構成及び負担割合は、厚生労働省資料に基づいています。

(注2) 雇用保険(失業給付)については、雇用情勢等に応じて1/4または1/40に相当する額を国庫が負担することとなり、雇用保険(育児休業給付)については、令和4年度～令和6年度の間、本来の国庫負担額(1/8)の10%に相当する額を、国庫が負担することとなっています。児童・障害福祉のうち、児童入所施設等の措置費の負担割合は、原則として、国1/2、都道府県・指定都市・中核市・児童相談所設置市1/2等となっています。児童手当については、令和5年度当初予算ベースの割合を示したものです。なお、事業主負担には公務員分を含みます。

(注3) この図は社会保障財源及び給付の全体像と国の財務書類との関係を概略的にイメージ化したものであり、実際には保険料の軽減分の一部を国庫負担で賄っているもの等があります。

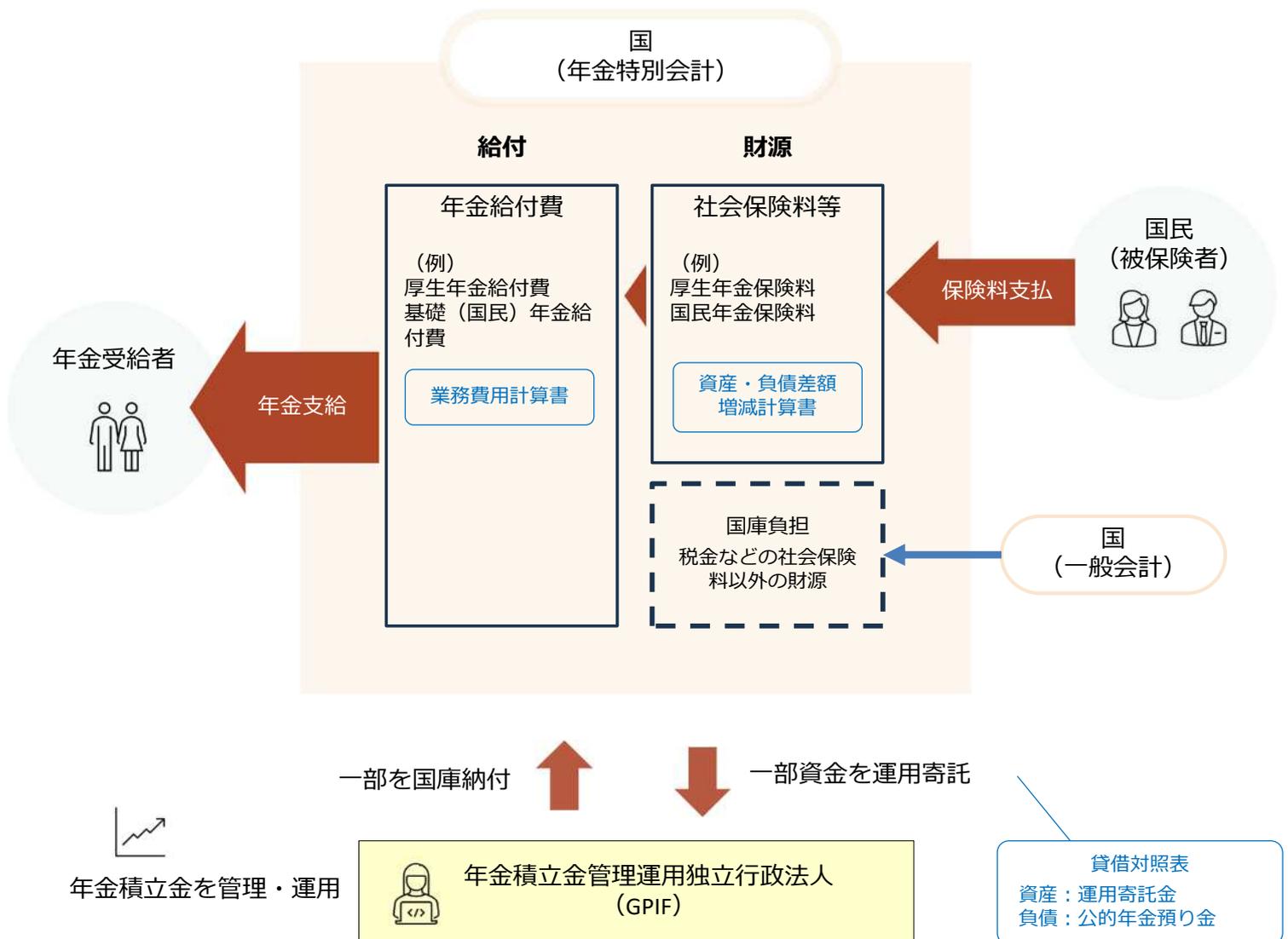
## (7) 公的年金(厚生年金・国民年金)について

- ◇ 年金給付に関する費用は、社会保障に係る費用の半分近くを占める最も大きな費用です。
- ◇ 財務書類上は、賦課方式の制度に基づく1年間の費用や財源などが計上されているほか、注記において年金制度の現況や将来の財政の負担(見通し)も記載されています。

### 公的年金制度

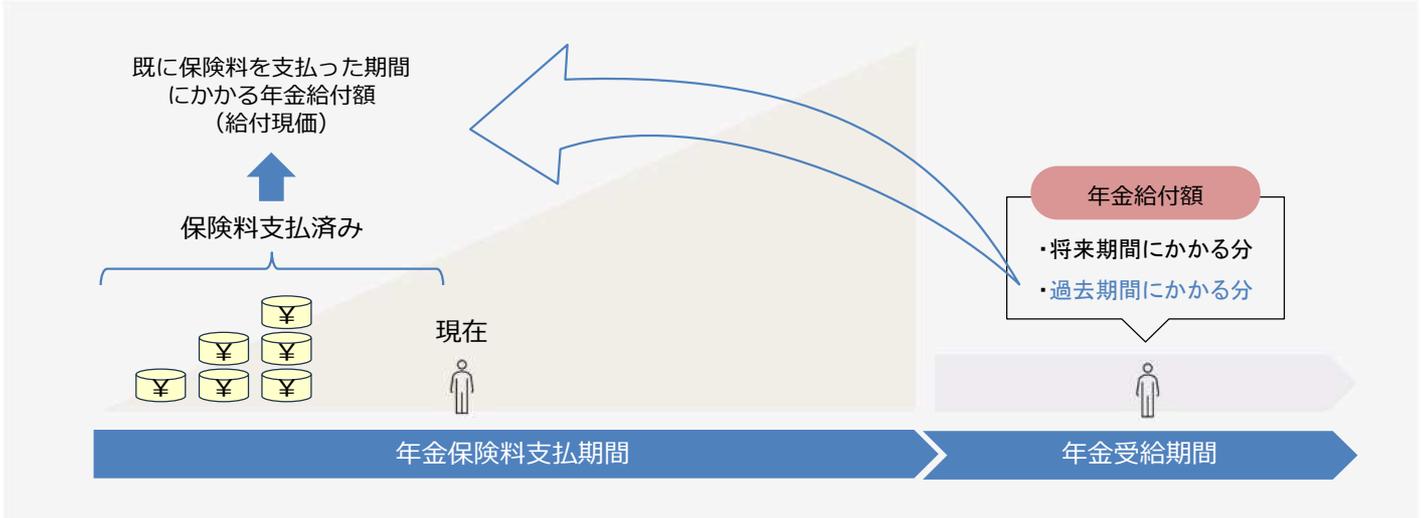
我が国の公的年金制度は、各年度の給付は各年度の収入(保険料や税金など)により賄う財政方式で運用しています。すなわち、各年度ごとに国民の保険料負担分で年金支給を行う賦課方式を基本とした制度となっています。

#### <賦課方式イメージ>



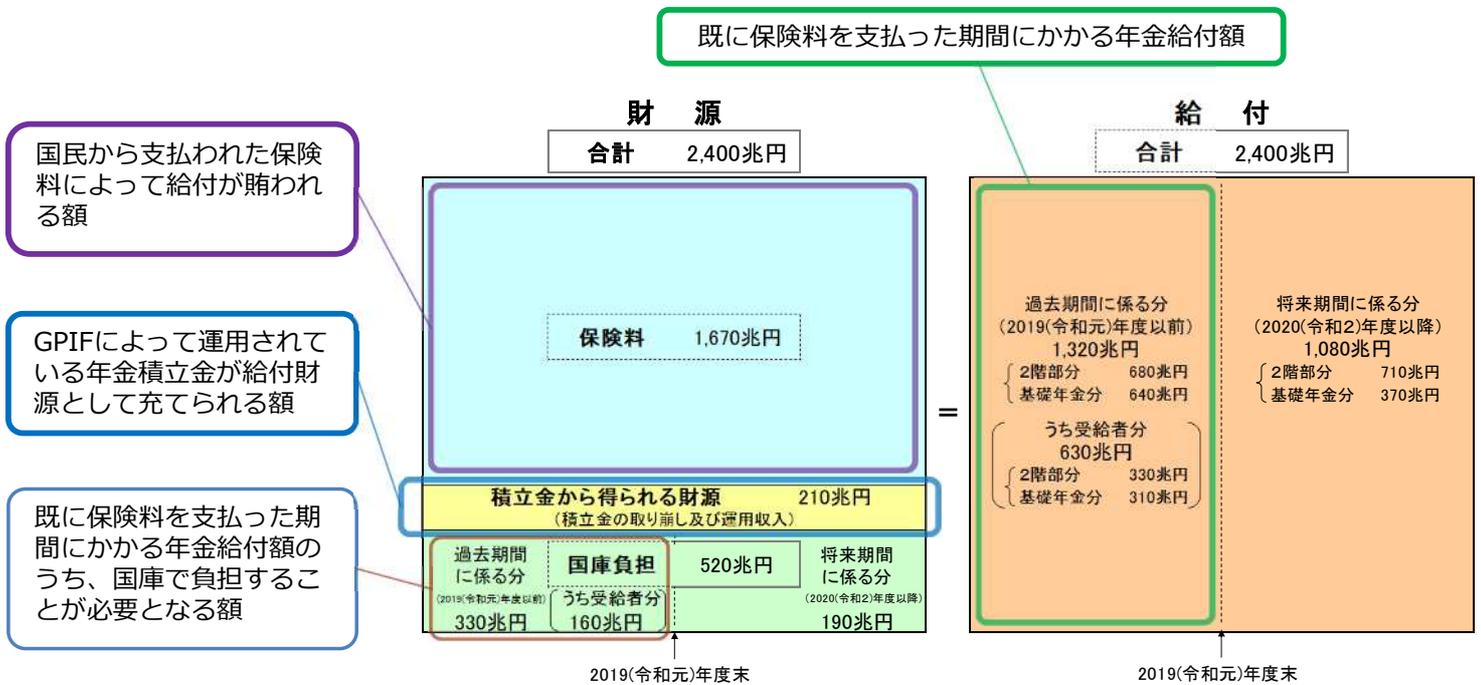
「国の財務書類」では、既に保険料を支払った期間にかかる給付の規模がどの程度なのかといった関心もあることなどから、厚生労働省が作成している「将来の公的年金の財政見通し（財政検証）」から引用し、公的年金の財政均衡期間（概ね100年間）における給付とその財源を一時金換算したもの（給付現価等）を示しています。

<既に保険料を支払った期間にかかる年金給付額（給付現価）のイメージ>



注記

2019年財政検証において、長期的な経済状況を見通す上で重要な全要素生産性（TFP）上昇率を軸とした幅広い複数の経済の前提に基づき、財政均衡期間における給付と財源の内訳（全て現時点（2019（令和元）年度）の価格に換算）を示しています。



<運用利回りによる換算>

人口：出生中位、死亡中位 経済：ケースⅢ

(長期的な経済前提 物価上昇率：1.2% 賃金上昇率(実質<対物価>)：1.1% 運用利回り(スプレッド<対賃金>)：1.7%)

注意事項

財政検証は5年に1回実施されており、最新の財政検証結果は、2024年7月に公表されています。

実際は複数の経済前提に基づき複数のケースが公表されており、給付現価の換算も運用利回りによる換算と賃金上昇率による換算で給付現価等の金額は異なります。

